

41992

教科書文庫

4
810
41-1917
20000 65463

76 111

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

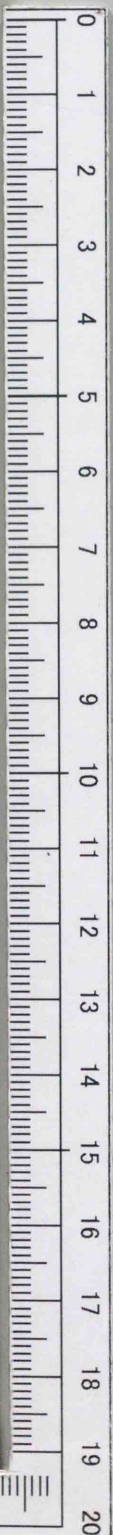
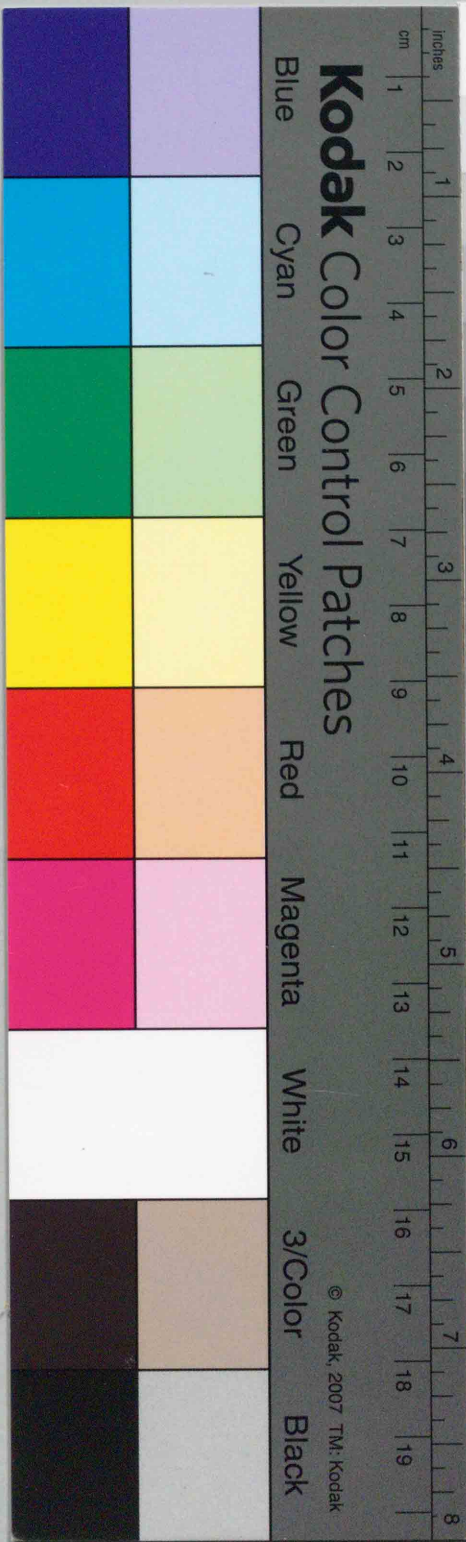


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
大6

吉田彌平編

增鏡鈔本

東京光風館藏版



資料室

文部省檢定濟

大正六年五月十三日 中國國語教科用科

吉田彌平編
增鏡鈔本

東京 光風館藏版



4a
810
大6

東京 英風館發行
吉田麗平編

對 意 趣 本

例 言

一本書は、中學校・高等女學校及び師範學校等の上級用に當つべき教科書として編纂せるものにして、増鏡の各篇に互り、趣味に重きを措きつゝ、その精粹をのみ採りたれど、又決して事實の聯絡に意を用ふることを忘れざりき。

一本書は、諸本を參酌して、原文の誤脱錯簡を校訂するに共に、多少の取捨を行ひ、簡明なる頭註を施し、又便宜上每篇に題名を附せり。

一本書は、句讀を正し、段落を整へ、歌辭・故語及び對話に引用符を附したり。

大正六年二月

編者識す

増鏡解題

増鏡は、後鳥羽天皇より後醍醐天皇まで十五代百五十年間の事を、流暢典雅なる文章を以て記せる假字歴史にして、大鏡と水鏡とを併せて世に三鏡と稱す。嵯峨の清涼寺にて年老いたる尼の物語を記せるさまに作れるは、他の二鏡なごと同じやうなれご、篇章を分ちて題號を掲げ、年次を逐うて事實を記せるは、榮華物語などの體裁に倣へるなるべし。かの承久の御企圖、元弘の御恢復及び南北兩統の起伏、西園寺家の榮華、北條氏の跋扈のさまなどは特に意を用ひたるが如く、随つて書中最も味ふべき文字なり。作者に關しては諸説紛々としてそれご定め難けれど、

この書の記事の最終なる正慶二年より程遠からぬ時代の撰な
るべきは明かなり。

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 鶴の林, 薪盡きにし, 二傳, 常, 尼, 鳩, 杖, 参れ, 腰, いたく, 坊, 行き, つき, づ, 申して, 夕日, 花, や, かに, さし, 入り, たる, を, 打見, やりて, あはれ]

序

鶴の林
沙羅樹林、即ち釋迦佛入滅の地。
薪盡きにし
入滅の義。
二傳
唐土に傳り、更に日本に傳りたる義。
嵯峨の清涼寺
山城國葛野郡上嵯峨。
常在靈鷲山
法華經壽量品の偈の句。
鳩の杖
老人の携ふる杖。

如月の中の五日は、鶴の林に薪盡きにし日なれば、かの如來二傳の御かたみのむつまじさに、嵯峨の清涼寺にまうで、常在靈鷲山りやうじよせんなご心のうちに唱へて拜み奉る。傍にやそちにもや餘りぬらんご見ゆる尼一人、鳩の杖にかゝりて参れり。ごばかりありて、たけく思ひ立ちつれご、いと腰いたくて堪へがたし。今宵はこの局にうち休みなん。坊へ行き、てみあかしの事なご言へ。ごて具したる若き女房のつきづきしき程なるをばかへしぬめり。釋迦牟尼佛ごたびく申して、夕日の花やかにさし入りたるを打見やりて、あはれ

にも山の端近く傾きぬめる日影かな。我が身の上のこゝちこそすれ。さてよりゐたるけしき何ごなくなまめかしく心あらんかしと見ゆれば、近く寄りて、いづくより詣で給へるぞ。ありつる人のかへりこん程、御伽せんはいかゞ。なごいへば、このわたり近く侍れど、年のつもりにや、いごはるけき心ちし侍る、あはれになん。こいふ。「さても、いくつにかなり給ふらん。」と問へば、「いさ、よくも我ながら思ひ給へわかれぬほごになん。百こせにもこよなく餘り侍りぬらん。來し方行く先ためしもありがたかりし世のさわぎにも、この御寺ばかりは恙なくおはします、なほやんごごなき如來の御光なりかし。」なごいふも古代にみやびやかなり。年のほごなご聞くもめづらしき心ちして、かゝる人こそ昔

雲林院
山城國葛野郡
假名の日本
紀
大鏡
世繼が云々
今鏡

物語もすなれと思ひ出でられて、まめやかに語らひつゝ、昔の事の聞かまほしきまゝに、年のつもりたらん人もがなご思ひ給ふるに、うれしきわざかな、少しのたまはせよ。おのづから古き歌なご書きたるものゝ片はし見るだに、その世に逢へる心ちするぞかし。こいへば、すげみたる口うちほゝゑみて、いかでか聞えん。若かりし世に見聞き侍りしこごは、こゝらの年頃にぬば玉の夢ばかりだになく、おぼゝれて何のわきまへか侍らん。こはいひながら、けしうはあらず、あへなんご思へる氣色なれば、いよくいひはやして、かの雲林院の菩提講に参りあへりし翁の言の葉をこそ、假字の日本紀にはすめれ。又かの世繼がうまごごかいひしつくも髪のお物語も、人のもてあつかひぐさになれるは、御ありさま

のやうなる人にこそ侍りけめ。なほのたまへ。なごすかせば、さは心得へかめれど、いよく口すげみがちにて、そのかみは、げに人の齡もたかく、きもつよかりければ、それに隨ひてたましひもあきらかにてや、しか聞えつくしけん。あさましき身はいたづらなる年のみ積れるばかりにて、昨日今日といふばかりの事をだに、目も耳もおぼろになりにて侍れば、ましていご怪しき僻事ごもにこそは侍らめ。そもさやうに御覽じ集めけるふる事ごもはいかにぞ。いふ。いさ、たゝおろく、見及びしものごもは、水鏡といふにや。神武天皇の御代よりいごあらゝかに記せり。その次には大鏡、文徳のいにしへより後一條の御門まで侍りしにや。又世繼ごか四十帖の草紙にぞ、延喜より堀河の先帝までは少

四十帖の草紙
榮華物語

彌世繼
今傳はらず

しこまやかなる。又なにがしの大臣の書き給へるご聞き侍りし今鏡には、後一條より高倉院までありしなめり。まごごや、いや世繼は隆信朝臣の後鳥羽院の御位の御程までを記したりごぞ見え侍りし。その後のごごなん、いご覺束なくなりける。おぼえ給へらむ所々までものたまへ。今宵誰も御伽せん。かゝる人に逢ひ奉れるも、しかるべき御契あらんものぞ。なご語らへば、そのかみの事はいみじうたごくしければ、誠に事のつゝきを聞えざらんも、覺束なかるべければ、たえくしに少しなん。僻事ごも多からんかし。そはさしなほし給へ。いごかたはらいたきわざにぞ侍るべきかな。かの古き事ごもには、なぞらへ給ふまじうなん。さて、

おろかなる心や見えん、ます鏡

ふるき姿にたちはおよばで。

さわな、かし出でたるもにくからず、いと古代なり。「さらば今のたまはむ事をも又書き記して、かの昔の面影にひさしからむこそは思すめれ。」といらへて、

今もまた昔をかけばます鏡

ふりぬる代々の跡にかさねん。

増鏡鈔本

目次

一 おごろのした

長田のいね……………一頁

嶺のわか松……………五

野邊のみどり……………八

あまの釣舟……………九

二 新島もり

銀杏の落葉……………三

我が身の宿世……………七

我が涙……………二

三 三ふち衣

八重むぐら……………三

ありし別……………三

磯のくさ……………三

四 三神山

椿葉の影……………四

五 内野の雪

千代のみち……………四

六 煙の末々

あさましの火……………五

峯の秋風……………五

菊紅葉……………五

七 おりゐる雲

藤なみの影……………五

八 山のもみぢ葉

和歌の浦……………五

九 北野の雪

枯野の眞葛……………六

秋の雨……………六

一〇 あすか川
峰のもみぢ葉……………三

一一 草まくら
うるほふ袖……………五

一二 老のなみ
花の白雪……………六
かみ風……………七

一三 今日の日影
窓のほたる……………五

一四 つげの小櫛

秋ぎりの空……………六
つたもみぢ……………七

一五 うら千鳥
むなしき名……………六

一六 秋のみ山
かたぶく月……………六

一七 春のわかれ
いかならん時……………九

一八 むら時雨
闇のうつ……………三

ありあけの月……………六

思はぬ山の紅葉……………九

一九 久米のさら山

こ の 宿……………一五

水 の 泡……………一〇八

花のこずゑ……………一一〇

あられの音……………一二三

二〇 月草の花

なぎさの水……………一二七

かへる波……………一三二

目次終

増鏡鈔本

一 おどろのした

一 長田のいね

みかごはじまり給ひてより八十二代にあたりて、後鳥羽院
 ご申すおはしましき。御諱は尊成たかむね、これは高倉院第四の御
 子、御母は七條院ご申しき。修理大夫信隆のぬしのむすめ
 なり。治承四年七月十五日に生れさせ給ふ。

その年の春の頃、建禮門院后宮ご聞えし御腹の第一の御子
 安徳三つになり給ふに位を譲りて、みかごはおり給ひにし

七條院
 藤原殖子
 建禮門院
 高倉天皇の中
 宮平徳子
 清盛の女
 みかご
 高倉天皇

院

高倉天皇

新帝

安徳天皇

三の宮
守貞親王

故院
高倉天皇

かば、平家の一ぞうのみ愈、時の花をかざしそへて花やかな
 りし世なれば、けちえんにももてなされ給はず、またの年養
 和元年正月十四日に院さへかくれさせ給ひにしかば、いよ
 いよ位などの御望あるべくもおはしまさざりしを、かの新
 帝平家の人々にひかされて、遙なる西の海にさすらへ給ひ
 にし後、後白河法皇御孫の宮たちわたし聞えて見奉り給ふ
 時、三の宮を次第のまゝにご思されけるに、法皇をいこいた
 う嫌ひ奉りて泣き給ひければ、あなむづかし。さてゐてはな
 ち給ひて、四の宮こゝにいます。ご宣ふに、やがて御膝の上に
 抱かれ奉りて、いごむつまじげなる御氣色なれば、これこそ
 誠のうまごにおましけれ。故院のちごおひにもまみなご
 おぼえたまへり。いごらうたし。さて、壽永二年八月二十日

先帝
安徳天皇

長田村
天田郡下六人
部に屬す



御鳥羽天皇(攝津國水無瀨宮藏)

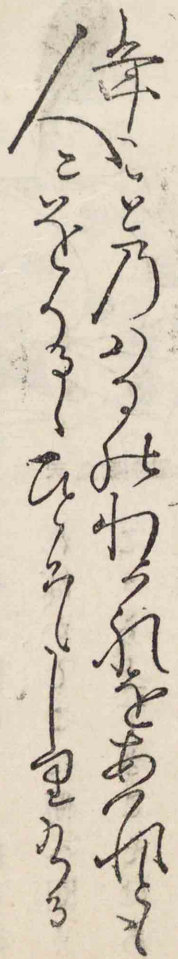
御年四にて位に即かせたまひけり。
 かくてこの帝、元暦元年七月二十八日御即位、そのほごのこ

ご常のまゝなるべし。平家の
 人々いまだ筑紫にたゞよひて、
 先帝ご聞ゆるも御このかみな
 れば、かしこに傳へ聞く人々の
 こゝち、上下さこそはありけめ
 ご思ひやられて、いごかたじけ
 なし。同じき年の十月二十五
 日に御禊、十一月十八日に大嘗
 會なり。主基がたの御屏風の歌、兼光の中納言といふ人、丹
 波國長田村さかやを。

神代より今日のためごや八束穂に

長田の稻のしなひそめけり

帝いごおよすげてかしくおはしませば、法皇もいみじう
うつくしと思さる。文治二年十二月一日御書始せさせ給



御鳥羽天皇宸筆
(古畫備考に據る)

宸筆
年こそのはる
のわかれをあ
はれさも人に
をくるゝひさ
そしりける
あまねき御
うつくしび
古今集序に
「あまねき御
うつくしびの涙
八島の外まで
流れ、ひろき
御惠の陰筑波
山の麓よりし
げくおはしま
し」

ふ。御年七つなり。建久元年正月三日、御年十一にて御元
服し給ふ。同じき三年三月十三日に法皇かくれさせ給ひ
し後は、帝ひごへに世をしろしめして、四方の海波靜かに吹
く風も枝を鳴さず、世治り民安くして、あまねき御うつくし

びの浪秋津島の外まで流れ、しげき御惠筑波山のかげより
も深し。よろづの道々にあきらけくおはしませば、國にざ
えある人多く、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。中にも敷島
の道なんすぐれさせ給ひける。御歌數知らず人の口にあ
る中にも、

奥山のおごろの下も踏分けて、

道ある世ぞご人に知らせん。

ご侍るこそ、まつりごご大事と思されけるほごしるく聞え
て、いごいみじくやむごごなくは侍れ。

二嶺のわか松

建久九年正月十一日、第一の御子土御門院四つになり給ふに御

位ゆづり申させ給ひており給ふ。御年十九。位におはします。ここ十五年なりき。今日明日二十ばかりの御齡にて、いごまだしかるべき御事なれども、よろづ處せき御有様よりはなかく、やすらかに、御幸など御心のまゝならんごにや。世をしろしめす事は今もかはらねば、いごめでたし。鳥羽殿白河殿なども修理せさせ給ひて、常に渡りすませ給へご、なほ又水無瀬といふ處にえもいはずおもしろき院づくりして、しばく通ひおはしましたつ、春秋の花紅葉につけても御心ゆくかぎり、世をひかして遊をのみぞし給ふ。處からもはるく、ご川に臨める眺望、いごおもしろくなん。元久の頃詩に歌を合せられしにも、ごりわきてこそは、見渡せば山もご霞む水無瀬川。

鳥羽殿
山城國紀伊郡
白河殿
山城國愛宕郡
水無瀬
攝津國三島郡
島本村大字廣瀬

ゆふへは秋ごなに思ひけん。

萱葺の廊渡殿なご、はるくご艶にをかしうせさせ給へり。御前の山より瀧落されたる石のたゞずまひ、苔深きみやま木に枝さしかはしたる庭の小松も、げにくご千代をこめたる霞の洞なり。前栽つくろはせ給へる頃、人々あまた召して御遊なごありける後、定家の中納言いまだ下臈なりける時に奉られける。

あり經けんもごの千年にふりもせて、

わが君ちぎるみねのわか松。

君が代にせき入るゝ庭を行く水の

岩こそ數は千代も見えけり。

三 野邊のみどり

失せにし人
右京大夫源師
光
千五百番の
歌合
建仁元年後鳥
羽院をはじめ
當時一流の歌
人三十人の歌
各百首を番へ
その中十人を
判者とし、優
劣を判せしめ
たるもの。院
御自身も歌を
もて秋の二三
の巻を判せさ
せ給へり。

上のその道を得給へれば、下もおのづから時を知るならひ
にや、男も女もこの御代にあたりてよき歌よみ多く聞え侍
りし中に、宮内卿さいひしは、村上の御門の御後に俊房の左
の大臣と聞えし人の御末なれば、はやうはあて人なれど、つ
かさあさくて打續き四位ばかりにて失せにし人の子なり。
まだいそ若き齡にてそこひもなく深き心ばへのみ詠み
しこそ、いそありがたく侍りけれ。この千五百番の歌合の
時院の上宣ふやう、こたみは皆世にゆりたるふるき道のも
のごもなり。宮内卿はまだしかるへけれども、けしうはあ
らずご見ゆめればなん。かまへてまるが面おこすばかり
よき歌つかうまつれ。ご仰せらるゝに、おもて打赤めて涙ぐ

目に見えぬ
鬼神
古今集序に
「力をもいれず
して天地を動
かし、目に見
えぬ鬼神をも
あはれと思は
せ」

みて候ひけるけしき、かぎりなきすきの程もあはれにぞ見
えける。さてその御百首の歌いづれもごりく、なる中に、
薄く濃き野邊の緑の若草に

あごまで見ゆる雪のむらぎえ。

草の緑の濃き薄き色にて、去年のふる雪の遅く疾く消えけ
るほごを推しはかりたる心ばへなご、まだしからん人はい
ご思ひ寄り難くや。この人年つもるまであらましかば、げ
にかばかり目に見えぬ鬼神をも動しなましに、若くて失
せにし、いそいそほしく、あたらしくなん。

四 あまの釣舟

また清撰の御歌合さて、かぎりなくみが、せ給ひしも、水無

瀬殿にての事なりしにや。當座の衆議判なれば、人々のこ
こちいさおき所なかりけんかし。建保二年長月の頃勝
れたるかぎり抜き出で給ふめりしかば、いづれかおろかな
らん。中にもいみじかりしことは、第七番に左院の御歌、
あかしがた浦路はれゆく朝風に

霧に漕ぎ入るあまのつり舟、

さありしに、北面の中に藤原秀能さて、年比もこの道にゆり
たるすきものなれば、召し加へらるゝこと常の事なれど、や
むごとなき人々の歌だにも、あるは一首二首三首には過ぎ
ざりしに、この秀能九首まで召されて、しかも院の御かたて
にまるれり。さてありつる蟹の釣舟の御歌の右に、
契りおきし山の木の葉の下紅葉

そめしころもに秋風ぞ吹く。

昔の躬恆が
醍醐天皇躬恆
を御階の下に
召して、月を
弓張さいふ心
をつかうまつ
れさ仰ありし
に、「照る月を
弓張さしもい
ふ事は山べを
さしていれば
なりけり。」と
奏して、大桂
を賜はりしと
大鏡に見ゆ。
魚袋の歌
吹く風に氷さ
けたる池のう
をは千代まで
松のかげにか
くれん。
吉水の僧正
慈圓。吉水は
山城國愛宕郡
大谷の別名。

ご詠めりしは、その身の上にごりて、永き世のめいばく何か
はあらんごぞ聞き侍りし。昔の躬恆が御階のもとに召さ
れて、「弓張さしもいふことは。」と奏して、御衣賜はりしをこそ、
いみじき事には言ひ傳ふめれ。また貫之が家に、師輔の大
臣、魚袋の歌の返しごぶらひにおはしたりしをも、道の高名
ごこそ世繼には書きて侍れ。近き頃は西行法師ぞ北面の
ものにて、世にいみじき歌の聖なめりしが、今の代の秀能は、
ほごく古きにも立ち勝りてや侍らん。この度の御歌合
大方いづれごなくうちみだして、勝れたる限をえり出でさ
せ給ひしかば、おのくむらくにぞ侍りける。吉水の僧
正ご聞えし、またたくひなき歌の聖にていましき。それだ

に四首ぞ入り給ひにける。さのみは事長ければもらしぬ。

二 新島もり

一 銀杏の落葉

新院
土御門上皇

新院の御位のはじめつかた、正治元年正月、頼朝はあづまにて頭おろして、同じき十三日、年五十三にてかくれにけり。治承四年より天の下にもちひられて、二十年ばかりや過ぎぬらん。北方は、さきに聞えつる北條四郎時政が女なり。その腹にをのこ二人あり。太郎をば頼家といふ。弟をば實朝と聞ゆ。大將かくれて後、兄はやがて立ち繼ぎて、建仁元年六月二十二日、從二位、同日將軍の宣旨を賜はる。又の

年左衛門督になさる。かゝれども、少しおちぬ心ばへなごありて、やうく兵ごも背きくゝにぞなりにける。

時政は遠江守といひて、故大將のありし時より私の後見なりしを、まいて今はうまこの世なれば、いよく身重く勢そふこそ限なくて、うけはりたるさまなり。子二人あり。太郎は宗時、次郎は義時といへり。次郎は心も猛く魂まされる者にて、左衛門督をばふさはしからず思ひて、弟の實朝の君に付き従ひて、思ひ構ふる事なごもありけり。督は日にそへて人にもそむけられ行くに、いごいみじき病をさへして、建仁三年九月十六日、年二十二にて頭おろす。世の中こり多く、何事もあたらしかるべき程なれば、さこそ口惜しかりけめ。をさなき子の一萬といふにぞ世をば譲りけれ

修善寺
田方郡修善寺
村。

筆蹟
君がため神の
めくみのあつ
さゆみ矢をよ
ろつ世のすま
もたのもし。

閑院の内裏
京都二條の南
西洞院の西一
町にありき。

ご、うけひく者なし。入道はかの病つくろはんさて、鎌倉よ
り伊豆國へいでゆあびに越えたりける程に、かしこの修善
寺といふ處にて遂に討たれぬ。一萬もやがて失はれけり。
これは實朝と義時と一つ心にてたばかりけるなるべし。

君のつち先非のうき、れあつさゆ
まをくら片をのすまゝあり

源實朝筆蹟
(赤松香雨藏)

さて今は偏に實朝故大將の跡をうけつぎて、つかさ位滞る
ことなく、よろづ心のまゝなり。建保元年二月二十二日正
二位せしは、閑院の内裏造れる賞ごぞ聞き侍りし。同じき
六年權大納言になりて、左大將を兼ねたり。左馬のつかさ

をぞつけられける。その年やがて内大臣になりても、猶大
將もこのまゝなり。父にもやゝ立ち勝りていみじかりき。
この大臣は大方心ばへうるはしく、猛くも優しくもよろづ
めやすければ、ことわりにも過ぎて武士の靡き従ふさま、父
にも超えたり。いかなる時にかありけん

山はさけ海はあせなむ世なりとも、

君にふた心わがあらめやも。

ごぞ詠みける。

時政は建保三年にかくれにしかば、義時ぞあごを継ぎける。
故左衛門督の子にて、公曉といふ大徳あり、親の討たれにし
ことをいかでかやすき心あらん、いかならん時にかこのみ
思ひわたるに、この内大臣また右大臣にあがりて、大饗なご

尊者
大饗の時に招
く首席の客。

珍しくあづまにて行ふ。京より尊者を始め上達部殿上人
多くごぶらひいましけり。さて鎌倉に移し奉れる八幡の
御社に神拜にまうづる、いこいかめしき響なれば、國々の武
士はさらにもいはず、都の人々も扈從しけり。たち騒ぎの
のしる者、見る人も多かるなかに、かの大徳打紛れて女のま
ねをして、白き薄衣ひきをり、大臣の車よりおるゝ程をさし
のぞくやうにぞ見えける。あやまたず首を打落しぬ。そ
の程のごよみ、いみじき思ひやりぬべし。かくいふは承久
元年正月二十七日なり。そこらつごひ集れるものごも、た
だあきれたるより外のこごなし。京にも聞召しおごろく。
世の中火をけちたるさまなり。扈從に西園寺の宰相中將
實氏も下り給ひき。さならぬ人々も、泣くく、袖をしぼり

てぞ上りける。

二 我が身の宿世

院
後鳥羽院法
皇。
あづまの代
官
京都守護。

さても院の思し構ふる事、忍ぶごすれごやうく、漏れ聞え
て、東さまにもその心づかひすべかめり。あづまの代官に
て伊賀の判官光季ごいふものあり。かつく、かれを御か
うじのよし仰せらるれば、御方に參るつはものごも押寄せ
たるに、遁るべきやうなくて腹切りてけり。まづいごめで
たしごぞ院は思召しける。あづまにもいみじうあわて騒
ぐ。「さるべくて身の失すべき時にこそあなれ。」ご思ふもの
から、討手の攻め來りなん時にはかなきさまにて屍を曝さ
じ。おほやけご聞ゆごも、みづからし給ふ事ならねば、且は

我が身の宿世をも見るばかり。ご思ひなりて、弟の時房と泰時といふ一男と二人をかしらごして、雲霞のつはものをたなびかせて都にのぼす。泰時を前にすゑて言ふやう、おのれをこの度都に参らす事は、思ふ所多し。本意の如く清きしにをすべし。人にうしろを見えなんには、親の顔また見るべからず。今を限ご思へ。賤しけれごも、義時君の御爲に後めたき心やはある。されば横さまの死をせん事はあるべからず。心を猛く思へ。おのれ打勝つものならば、再びこの足柄箱根山は越ゆべし。なご泣くく言ひ聞かす。まここにしかなり。また親の顔拜まん事もいご危し。ご思ひて、泰時も鎧の袖を絞る。かたみに今や限ごあはれに心細げなり。

かくて打出でぬるまたの日、思ひかけぬほごに、泰時只一人鞭を上げて馳せ來たり。父胸うちさわぎて、いかに。ご問ふに、軍のあるべきやう、大方のおきてなごをば仰の如くその心を得侍りぬ。もし道のほごりにも、圖らざるに、辱く鳳輦を先だて、御旗をあげられ、臨幸の嚴重なる事も侍らんに参りあへらば、その時の進退いか侍るべからん。この一事を尋ね申さんごて、一人馳せ侍りき。ごいふ。義時ごばかり打案じて、賢くも問へるをのこかな。その事なり。正に君の御輿に向ひて弓を引くごは、いかあらん。さばかりの時は、兜をぬぎ、弓の弦をきりて、偏にかしこまりを申して身を任せ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましなから、軍兵を賜はせば、命を棄て、千人が一人になるまでも

義朝

賴朝
能保室

良經室

道家

賴經

公經室

道家室

御うまご
將軍賴經

七條院

後鳥羽院の御
母種子

修明門院

順徳院の御母
重子

顯密

顯は天台宗
密は眞言宗

戦ふべし。と言ひも果てぬに、急ぎ立ちにけり。

都にも思しまうけつる事なれば、ものゝふごも召しつごへ、
宇治勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用意心こそな
り。公經の大將一人のみなん、御うまごのこともさる事に
て、北方、一條中納言能保といふ人の女なり、その母北方は故
大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重く思して、さ
しいらへもせず、院の御心の軽きことゝあぶながり給ふ。
七條院の御ゆかりの殿ばら坊門大納言忠信、尾張中將清經、
中御門大納言宗家、また修明門院の御はらからの甲斐宰相
中將範茂など、つきく、數多聞ゆれど、さのみは記し難し。
軍にまじり立つ人々、此の外の上達部にも殿上人にも數多
ありき。御修法ごも數知らず行はる。やむごこなき顯密

中院
土御門上皇

新院
順徳上皇

の高僧も、かゝる時こそたのもしきわざならぬ。おのゝ
心を致してつかうまつる。御みづからもいみじう念せさ
せ給ふ。中院はあかで位をすへり給ひしより、言に出で、
こそものし給はねど、世のいご心やましきまゝに、かやうの
御騒にも殊にまじらせ給はざめり。新院は同じ御心にて
よろづ軍の事なごもおきて仰せられたり。

三 我が涙

いつの年よりも五月雨晴間なくて、富士川天龍なごえもい
はず漲りさわぎで、いかなる龍馬も打渡しがたければ攻め
のぼる武者ごも、あやしく惱めり。かゝれごも遂に都に
近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出立つ。その勢六萬餘

六月十日あ
まり
承久三年六月
十五日

本院
後鳥羽法皇

騎ごかや。宇治勢多へ分ち遣す。世の中ひゞきのゞしる
様、言の葉も及ばず、まねび難し。あるは深き山へ逃げごも
り、遠き世界に落ちくだり、すべて安げなく騒ぎみちたり。
「いかゞあらん。」ご君も御心亂れて思し惑ふ。かねては猛く
見えし人々も、まごこの際になりぬれば、いご心あわたゞし
く色を失ひたる様ごも、たのもしげなし。六月十日あまり
にや、いくばくの戦だになくて、遂に御方の軍敗れぬ。荒磯
に高潮なごのさしくるやうにて、泰時ご時房ご亂れ入りぬ
れば、いはん方なくあきれて、上下たゞ物にぞあたり惑ふ。
あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍はから
ひおきてつゞ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべし
ご聞ゆれば、女院宮々、所々におぼし惑ふ事さらなり。本院

ものにもが
なや
こりかへすも
のにもがなや
世の中をあり
しながらのわ
が身ご思は
む。

信實朝臣
藤原氏、似繪
を以て著る。

は隱岐國におはしますへければ、まづ鳥羽殿へ綱代車のあ
やしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日をかぎりの御
ありき、あさましようあはれなり。「ものにもがなや。」ご思さる
るもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に
一二やあまらせ給ふらん。まだいごほしかるべき御程な
り。信實朝臣召して御姿うつしかゞせらる。七條院へ奉
らせ給はんごなり。かくて同じき十三日に御船にたてま
つりて、遙なる浪路を凌ぎおはします御心ち、この世の同じ
御身ごもおぼされず。いみじう、いかなりける世々の報に
かごうらめし。新院も佐渡國に遷らせ給ふ。
まごごや、七月九日、帝をもおろし奉りき。この卯月かごよ、
御讓位ごてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にて

四十五日と
かや
秦の子嬰

若宮
後嵯峨天皇
觀通
通宗
通子
定通
通方
承明門院
在于(土御門天)

おり給へるためしも、これやはじめなるらん。唐土にぞ、四十五日とかや位におはする例ありけりこそ、からの書讀みし人の言ひし心ちする、それもかやうの亂やありけん。さて上達部殿上人、それより下はた残りなく、この事にふれにしたぐひは、重く軽く罪にあたる様いみじげなり。中院ははじめよりしろしめさぬ事なれば、あづまにも咎め申さねど、父の院遙に遷らせ給ひぬるに、長閑にて都にてあらん事いとおそれありと思されて、御心もてその年閏十月十日土佐國の幡多といふ處に渡らせ給ひぬ。去年の如月ばかりにや、若宮いでき給へり。承明門院の御せうごに通宗の宰相中將ごて、若くて失せ給ひにし人のむすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家にこゝめ

奉り給ひて、近くさぶらひける北面の下藤一人、召次なごばかりぞ御供つかうまつりける。いとあやしき御手輿にて下らせ給ふ。道すがら雪かきくらし、風吹き荒れ、ふゞきして、來し方行くさきも見えず、いと堪へ難きに御袖もいたく凍りて、わりなき事多かるに、

うき世にはかゝれごてこそ生れけめ、

こころわり知らぬ我が涙かな。

「せめて近きほごに。」とあづまより奏したりければ、後には阿波國にうつらせ給ひにき。

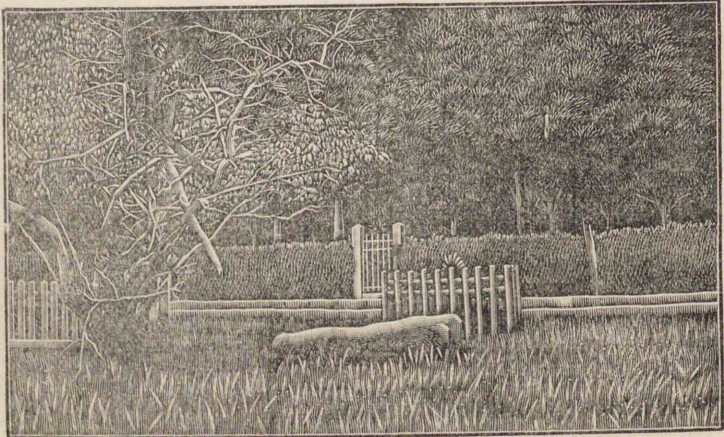
四 村雨の露

四つにて位に即き給ひて、十五年おはしましき。おり給ひ

津の國のこ
 やの
攝津國島上郡
 昆陽野、後拾
 遺集和泉式部
 「津の國のこ
 やこも人をい
 ふべきにひま
 こそなけれ葦
 の八重葦」
 藐姑射の山
莊子に「藐姑
 射之山有神
 人、居焉。肌膚
 如氷雪、淖
 約若處子。」

て後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じ事な
 りしかば、すべて三十八年が程、この國のあるじとして萬機
 の政事を御心ひこつにをさめ、百の官をしたがへ給へりし
 その程、吹く風の草木を靡かすよりも勝れる御有様にて、遠
 きをあはれび近きをなで給ふ御惠、雨のあしよりもしげ、
 れば、津の國のこやのひまなき政事を聞召すにも、難波の葦
 の亂れざらんことをおぼしき。藐姑射の山の峯の松もや
 うやう枝をつらねて、千代に八千代をかさね、霞の洞の御す
 まひ幾春を経ても、空行く月日のかぎり知らず、のごけくお
 はしましぬへかりける世を、ありありてよしなき一ふしに、
 今はかく花の都をさへ立別れ、おのがちりくゝにさすらへ、
 磯の苫屋に軒をならべて、おのづからこゝふものごては、

浦に釣する蜃小舟、鹽焼く煙のなびく方をも、我がふる里の
 するべにかさばかり、ながめ過さ
 せ給ふ。御すまひごもは、それま
 で、月日を限りたらむだに、明日
 知らぬ世のうしろめたさに、いこ
 心細かるべし。まいて、いつをは
 てさか廻り逢ふべき限だになく、
 雲の浪、煙の波の幾重とも知らぬ
 境に、世をつくし給ふべき御様ご
 も、口惜しさいふもおろかなり。
 のおはします處は、人はなれ里
 遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入りて、山蔭にか



後鳥羽上皇隱岐仙宮宮址
 隱岐島前ノ島なる海村田山(ママ)カラムツサニ在り

柴のいほり

新古今集 西
行法師一、づ
くにも住まれ
すばたゝ住ま
であらむ柴の
庵のしばしな
る世に。
二千里の外
唐の白樂天の
詩「三五夜中
新月色、二千
里外故人心。」

住江
攝津國住吉郡
にあり。

たそへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の
柱に葦葺ける廊など、けしきばかり事そぎたり。まことに
柴のいほりのたゞしばしごかりそめに見たる御やごり
なれど、さる方になまめかしく、ゆるづきてなさせ給へり。
水無瀬殿思し出づるも夢のやうになん。はるくご見や
らるゝ海の眺望、二千里の外ものこりなき心地する、今更め
きたり。汐風のいごこちたく吹きくるを聞召て、
我こそは新島守よ、おきの海の
あらし浪風心して吹け。
同じ世にまた住江の月や見ん、
今日こそよそにおきの島守。
年もかへりぬ。處々浦々あはれなる事をのみ思しなげく。

佐渡院あけくれ御行をのみし給ひつゝ、猶さりごもご思さ
る。隠岐には浦よりをちの遙々霞み渡れる空をながめ
入りて、過ぎにし方かきつくしおもほし出づるに、行方なき
御涙のみぞごまらぬ。

うらやまし、長き日影の春にあひて、

汐汲むあまの袖やほすらん。

夏になりて、萱葺の軒端に五月雨の雫いご所せきも、御覽じ
なれぬ御心地に、さまかはりて珍しくおぼさる。

あやめふく萱が軒端に風すぎて、

しごろに落つる村雨の露。

初秋風のたちて、世の中いごゝ物悲しく露けさまさるに、い
はん方なくおぼしみだる。

故郷を別路におふるくずの葉の

秋はくれごもかへる世もなし。

たごしへなくながめしをれさせ給へる夕暮に、沖の方にい
ごちひさき木の葉の浮へるご見えて、漕ぎ來るを蟹の釣舟
かご御覽するほごに、都よりの御消息なりけり。墨染の御
衣、夜の御衾など、都の夜寒に思ひやり聞えさせ給ひて、七條
院よりまゐれる御文ひきあけさせ給ふより、いごいみじく
御胸もせきあぐる心ちすれば、やゝためらひて見給ふに、あ
さましくも、かくて月日經にけるご、今日明日ごも知らぬ
命のうち、今一たびいかで見奉りてしがな。かくながら
は、死出の山路も越えやるべうも侍らでなん。なごいご多く
みだれ書き給へるを、御顔におしあて、

和歌所

伊勢より須磨に

六條の御息所
伊勢より須磨
なる源氏の君
の許に、白き
唐紙四五枚ば
かりを書き續
けたる御消息
を奉りけるこ
ご、源氏物語
須磨の巻に見
ゆ。

垂乳根の消えやらで待つ露の身を

風よりさきにかでこはまし。

八百萬神もあはれぬ、垂乳根の

われ待ちえんご絶えぬ玉の緒。

初雁の翼につけつ、此處彼處よりあはれなる御消息のみ
常に奉るを御覽するにつけても、あさましよういみじき御涙
のもよほしなり。家隆の二位は新古今の撰者にも召し加
へられ、大方歌の道につけてむつまじく召しつかひし人な
れば、夜晝戀ひ聞ゆるご限なし。かの伊勢より須磨にま
ありけんも、かくやご覺ゆるまでぞ卷き重ねて書きつらね
まゐらせたる。和歌所の昔の面影、かすく、忘れがたうな
ご申して、つらき命の今日まで侍るごこの恨めしきよしな

私山り不...

寝覺して聞かぬを聞きて侘しきは、
あら磯浪のあがつきのごゑ。

ごあるを法皇もいみじご思して、御袖いたくしぼらせ給ふ。
浪間なきおきの小島の濱びさし、あがれおのゑの

木枯のおきの袖山吹きしをり、
あらくしをれて物思ふころ。

をりく、詠ませ給へる御歌ごもを書き集めて、修明門院へ
奉らせ給ふ。その中に。

水無瀬山わがふる里は荒れぬらん。
まがきは野らこ人も通はで。

かざしをる人もあらばや言ごはん、
おきのみ山に杉は見ゆれご。

限あればさてもたへける身のうさよ、
民のわらやに軒をならべて。

かやうのたくひすべて多く聞ゆれご、
にえなん。今また思出でば、ついでもごめでごて。

三 ぶぢ衣

一 八重むぐら

その頃、いごかずまへられ給はぬふる宮おはしけり。守貞、
親王ごぞ聞えける。高倉院第の御子なり。隠岐の法皇

一院
後鳥羽法皇

の御このかみなれば思へばやむごこなければ昔後白河法
皇安徳院の筑紫へおはしましてのちに見奉らせ給ひける
御孫の宮たちえりの時泣き給ひしによりて位にも即かせ
給はざりしかば世の中物恨めしきやうにて過し給ふ。さ
びしく人めまれなれば年を経て荒れまさりつゝ草深く八
重葎のみさしかためたる宮の中にいこ心細くながめおは
するに建保の頃宮のうちの女房の夢に冠したるもの數多
参りて劔璽を入れ奉るべきにおのゝ用意して候はれよ。
ごいふご見てければいこあやしう覺えて宮に語り聞えけ
ればいかでかさほどの事あらん。ご思しも寄らで遂に御髪
をさへおろし給ひてこの世の御望は絶ちてぬる心ちし
て物し給へるにこのみだれ出で来て一院の御ぞうは皆さ

北白川院
藤原陳子

まざまにさすらへ給ひぬればおのづからちひさきなご殘
り給へるも世にさし放たれてさりぬべき君もおはしまさ
ぬにより東よりのおきてにてかの入道親王の御子後堀河院の御
事の十になり給ふを承久三年七月九日俄に御位に即け奉
る。父の宮をば太上天皇になし奉りて法皇ご聞ゆ。いご
めでたく横さまの御さいはひおはしける宮なり。
孫王にて位に即かせ給へるためし光仁天皇より後は絶え
て久しかりつるに珍しくめでたし。その十二月一日に御
即位明くる年貞應元年正月三日御元服し給ふ。御諱茂仁
ご申す。御かたちもなまめかしくあてにぞおはします。
御母基家中納言のむすめ北白川院ご申しき。家實の大臣
また攝政になりかへらせ給ひてよろづおきて宣ふもさま

ざまに引きかへしたる世なりかし。

二ありし別

その年
寛喜三年。

まことや、その年十一月十一日阿波の院かくれさせ給ひぬ。
いごあはれにはかなき御事かな。例ならず思されければ、
御ぐしおろさせ給ひにけり。こゝら物をのみおぼして、今
年は三十七にぞならせ給ひける。今一度都をも御覽ぜず
なりぬる、いみじう悲しきを、隠岐の小島にも聞召しなげく。
承明門院はさまぐのうきこを見盡して、なほながらふ
る命のうごましきに、又かく同じ世をだに去り給ひぬる御
歎のいはん方なきに、なごさきだゝぬ。ご口惜しう思しこが
るゝ様こそわりにも過ぎたり。かしこにて召しつかひた

女院
承明門院

る御調度なにくれ、はかなき御手箱やうのものを都へ人の
まゐらせける中に、たまさかに通ひける隠岐よりの御文、女
院の御消息なごをひごつにこりしたゝめたる、いみじうあ
はれにて、御目も霧ふたがる心ちし給ふ。家隆の二位のむ
すめ小宰相ご聞えしは、人よりここに思ひしづみて、御服な
ごくろう染めけり。

うしご見しありし別は藤衣

やがてきるべき門出なりけり。

三磯のくさ

さまぐめでたくもあはれにも、いろくなる都のこごご
もをほのかに傳へ聞召して、隠岐にはあさましの年のつも

りや。御齡にそへて盡きせぬ御なげきぐさのみしげりそ
ふ。慰めには思しなれにしこゝて、敷島の道にのみぞ御
心をのへける。都へもたよりにつけつゝ、題をつかはし歌
を召せば、あはれに忘れがたく戀ひ聞ゆる昔の人々、我も我
もご奉れるをつれづれに思さるゝあまりに、みづから判じ
て御覽ぜられにけり。家隆の二位も、今まで生ける思ひ出
で、これをだに。ごあはれにかたじけなくて、ここ人々の歌
をも此處よりぞごり集めて參らせける。むかしの秀能は
ありしみだれの後、頭おろして深くこもりゐたり。如願ご
ぞいひける。それもこの度の御歌合に召せば、今更にその
かみの事さこそは思ひ出づらめ。例のかずくは、はいがで
か、たゝかたはしをだにこて、

ながらの山
大津市外長等
山。

山とし
古今集に「な
げきこる山と
し高くなりぬ
ればつらづぬ
のみぞまづつ
かれける。」

左、御製

人心うつりはてぬる花の色は

右家隆の二位

なぞもかく思ひそめけん、櫻花

秀能

わだの原八十島かけてしるべせよ、

山家といふ題にて、また左、御製

軒端あれて誰かみなせの宿の月、

すみこしまゝの色やさびしき。

水行船には誰住みを見てもふかふか、
我々も舟に乗りて、
水行船には誰住みを見てもふかふか、
我々も舟に乗りて、
水行船には誰住みを見てもふかふか、
我々も舟に乗りて、

右、家隆

さびしさはまだ見ぬ島の山里を

思ひやるにもすむ心ちして。

法皇御みづから判のことは書かせ給へるに、まだ見ぬ島を思ひやらむよりは、年久しく住みて思ひ出でんは、今少しこゝろざし深くや。さて我が御歌を勝とつけさせ給へる、いごあはれにやさしき御事なめり。かやうのはかなしごと、又は阿彌陀佛の御勤なごにまぎらはしてぞおはします。又御手習のついでに、

我ながらうごみはてぬる身の上に

涙ばかりぞ面がはりせぬ。

ふる里は入りぬる磯の草よ、たゞ

夕汐みちて見らくすくなき

この浦にすませ給ひて、十九年ばかりにやありけん、延應元年ごいふ二月二十二日、六十にてかくれさせ給ひぬ。今一度都へ歸らんの御志深かりしを、遂に空しくてやみ給ひにしごと、いごかたじけなく、あはれになさけなき世も今更心うし。近き山にて例のさほふになし奉るも、むげに人づくなに心細き御有様いごあはれになん。御骨をば能茂ごいひし北面の入道して御供に候ひしぞ、頸にかけ奉りて都にのぼりける。

四 三神山

一 椿葉の影

阿波院の宮
後嵯峨天皇

警策「若二策
之警一馬」の
意より出て
文の要所をい
ふ。轉じて勝
れて明敏なる
をいふ。

さても源大納言通方の預り奉られし阿波院の宮はおこな
び給ふまゝに、御心ばへもいりこきやうさくに、御かたちもい



後嵯峨天皇

る人もなく、心細げにて何を待つごしもなくかゝづらひて
おはしますも、人わろくあぢきなう思さるべし。御母は、土
御門の内の大い臣通親の御子に宰相の中將通宗とて若くて

ごうるはしく、けだかくやむ
ごこなき御有様なれば、なへ
て世の人もいごあたらしき
事に思ひ聞えけり。大納言
さへ曆仁の頃失せにしかば、
いよゝゝ真心につかうまつ

失せにし人の御女なり。それさへかくれ給ひにしかば、宰
相のはらからの姫君ぞ、御乳母のやうにて、つぐみ橋曇彌の釋迦佛
養ひ奉りけん心ちしておはしける。二つにて父帝に別れ
奉り給ひしかば御面影だに覺え給はねど、なほこの世の中
におはすご思されしまではおのづから逢ひ見奉るやうも
やなご、人知れず稚き御心にかゝりて思しわたりけるに、十
二の御年かごよ、かくれさせ給ひぬご傳へ聞き給ひし後は、
いよゝゝ世のうさを思しくんじつゝ、いごまめだちてのみ
おはしますを、承明門院は心苦しう悲しご見奉り給ふ。
はかなく明け暮れて、仁治二年にもなりにけり。土御門の
宮は二十にあまり給ひぬれど、御冠のさたもなし。城興寺
の宮僧正眞性と聞ゆる、御弟子に。さかたらひ申し給ひけれ

女院
承明門院。

石清水の社
山城國綾喜郡
なる男山ア幡
宮。
椿葉の影
本朝文粹大
江朝綱「徳是
北辰椿葉之影
再改、尊猶南
面松花之色十
廻」

内の上
四條天皇。

ばさやうにもご思して、女院にもほのめかし申させ給ひけるを、「いごあるまじき事。」とのみ諫め聞えさせ給ふ。その冬の頃宮いたう忍びて、石清水の社に詣でさせ給ひ、御念誦のごかにし給ひて、少しまごろませ給へるに、神殿のうちに、椿葉の影再び改る。「いごあざやかにけ高き聲にてうちずんじ給ふご聞きて、御覽じあげたれば、明方の空澄みわたれるに、星の光もけざやかにて、いご神さびたり。いかに見えつる御夢ならんご、あやしく思さるれご、人にも宣はず、ごまれかくもあれご愈、御學問をぞせさせ給ふ。年もかへりぬ。春の初はおしなべて、ほごくにつけたる家々の身の祝なご、心ゆきほこらしげなるに、睦月の五日より内の上例ならぬ御事にて、七日の節會にも御帳にもつか

將軍
藤原賴經
大殿
藤原道家。

せ給はねば、いごさうくしく人々おぼしあへるに、九日の曉かくれさせ給ひぬごての、しり合へる、いごあさましごもいふばかりなし。皆人あきれ惑ひて、なかく涙だいでこず。いまだ御つきもおはしまさず、また御はらからの宮なごもわたらせ給はねば、世の中いかになり行かんずるにかごたごりあへるさまなり。さてしもやはにて、東へぞ告げやりける。

將軍は大殿の御子、今は大納言ご聞ゆ。御後見は承久に上りたりし泰時朝臣なり。時房朝臣ご一所にて、小弓射させ酒もりなごして心ごけたる程なりけるに、京よりのはしり馬ごいへば、何事ならんご驚きながら、使召寄せて聞くに、いごあさまし。さりごてあるべきならねば、その席よりやが

若宮の社
鶴岡八幡宮の
若宮

て神事はじめて、若宮の社にて鬩をぞこりける。
その程都にはいごうかひたる事ども、心のひきく、いひし
ろふ。「佐渡院の宮たちによ、なご聞えければ、修明門院にも
御心ごきめきして、内々その御用意なごし給ふ。承明門院
ももしやなご、さまぐ御祈し給ふ。あづまの使都に入る
よし聞ゆる日は、兩女院より白河に人を立て、いつ方へか
参るご見せられけるぞ、理に、げに今見ゆへき事なれども、物
の心もごなきはさ覺ゆるわざぞかしご、例の口すげみてほ
ほるむ。

日ぐらし待たれて、城介義景ごいふもの三條河原に打出で
て、承明門院のおはしますなる院はいづくぞ。「ごかの院より
立てられたる青侍のいごあやしげなるにしも問ひければ、

聞く心ち現ごも覺えずしかくご申すまゝに、土御門殿へ
参りたれご、門は葎つよくかため、扉もさびつき、柱根朽ちて
あかざりけるを、郎等ごもにごかくせさせて、内に参りて見
まはせば、庭には草深く青き苔のみむして、松風より外はこ
たふるものなく、人の通へる跡もなし。故通宗宰相中將の
御弟を子にし給へりし定通のおご、ばかりぞ、何ごなくお
のづからの事もやご思ひて、なえはめる烏帽子直衣にて候
ひ給ひけるが、中門に出で、對面し給ふ。義景はきり戸の
わきに畏りてぞ侍りける。「阿波の院の御子御位に。」ご申し
て出でぬ。院の中の人々、上下夢の心ちして、物にぞあたり
まごひける。仁治三年正月十九日の事なり。世の人のこ
ちち皆驚きあわて、おしかへし此方に参りつごふ馬車の

四辻殿
修明門院の御所

閑院殿
先帝即ち四條天皇の皇居

中宮の御父
後嵯峨天皇の
中宮藤原姞子の御父實氏

響きさわぐ世のおこなひを、四辻殿にはあさましろ、なかな
か物おぼしまさるべし。又の日やがて御元服せさせ給ふ。
ひきいれに左大臣良参り給ふ。理髮三毛頭三毛辨定三毛嗣三毛つかうまつ
りけり。御諱邦仁、御年二十三。その夜やがて冷泉萬里小
路殿へうつらせ給ひて、閑院殿より劔璽なごわたさる。踐
祚の儀式いごめでたし。

五 内野の雪

一 千代のみち

中宮の御父も太政大臣になり給ひて、牛車ゆり給ふ。さる
べき事さいひながら、いごめでたし。その頃北山の花のさ

北山

西園寺。今の
金閣寺の邊に
ありき。實氏
の父公經建
つ。

院
後嵯峨天皇

女工所
大嘗會のとき
臨時に設くる
司

かりに、院に奏し給ふ。その花につけて、

朽ちはつる老木に咲ける花櫻

身によそへても今日はかざむ。

御かへしを忘れたるこそ口惜しけれ。

かくて御即位、御禊も過ぎぬ。大嘗會の頃、信實の朝臣とい
ひし歌よみの女の少將内侍、大内の女工所にょくしよにさぶらふに、雪
いみじう日ころ降りていかめしう積りたる曉、太政大臣の
たまひつかはしける、

九重の大内山のいかならん、

限も知らずつもる雪かな。

御かへし、少將内侍

九重の内野の雪に跡つけて、

遙に千代のみちを見るかな。

二月一日
寶治三年。

皇后宮
曠子内親王
内の上
後深草天皇
皇后宮

六 煙の末々

一 あさましの火

二月一日の夜、つねよりも九重の宮のうち人ずくなにて、おほかた夜もしづかなるに、子のさきばかりに、閑院殿の二條おもての對より火いできて、棟燃え落つるほごにぞ始めて見つけたる。あさましごもなのめなり。何のたごりもなく、只あわて騒ぎ、我も人もうつし心なければ、公直の中將の御ごのゐに候ひけるが、車の陣なるを召して、皇后宮の御方へ寄す。内の上をば御匣殿みくしやどの抱き奉らせ給ひて、宮もたてま

攝政殿
藤原兼經
前の太政大臣
藤原實氏
左大臣
藤原兼平
内大臣
藤原實基
院
後嵯峨院

つる。劔璽ばかりごり具して、門を急ぎ出でさせ給ふ。ごばかりありて、權中納言實雄の参り給へりける車に召し移りて、春日富小路に公相の大納言のおはする家に行幸なる。そのほごにぞ、攝政殿をはじめ、前の太政大臣、左大臣、内大臣より下殘なく、人々参りつごひ給ふ。院も御車引き出で、見奉らせ給ふ。かゝるほごに、閑院殿より春日は、方は、かありありとて、院のおはします萬里小路殿へひきかへして行幸あり。夜明けはて、後、又前の太政大臣の冷泉富小路へ行幸なりて、しばし内裏になりぬ。内の焼くることは、これをはじめにもあらず。世あがりての事はさしおきぬ。天徳四年村上のさばかりめでたかりし御代よりこの方、既に二十餘度になりぬるにや。聖の御

承元 土御門天皇の
承元二年十一
月
去年の冬
寶治二年十一
月二十日閑院
の内裏の内膳
屋焼けて神代
より傳はれる
釜焼けそこな
はる。

代にしもかゝる事は侍りしかど承元に焼けにし後は、久し
く、この四十四年はなかりつるに、去年の冬御釜焼け損じて
又かく打續きぬるをいごあさましう思す。何よりも帝の
御車に奉りて出でさせ給へるを、いたく例なき事ごかやご
て人々かたぶき申す。院も驚きおぼされて、古き事ごも廣
く尋ねられなごすべし。

二峯の秋風

太政大臣 藤原實氏
吹田 攝津國三島
郡
川 神崎川。

また太政大臣の津の國吹田の山莊にも、いごしばくおは
しまさせて、さまぐの御遊敷をつくし、いかにせんごもて
はやし申さる。川に臨める家なれば、秋深き月のさかりな
ごは殊にえんありて、門田の稻の風に靡くけしき、妻ごふ鹿

院 後嵯峨院。

の聲衣うつきぬたの音、峯の秋風、野邊の松虫、ごりあつめあ
はれそひたる處のさまに、鶉飼なごおろさせて、篝火ごもご
もしたる川のおもて、いごめづらしうをかしご御覽ず。日
頃おはしまして、人々に十首の歌召されしついでに、院の御
製、

川舟のさして、いづくかわがならぬ、

旅ごはいはじ、宿ご定めん。

ご講じ上げたる程、あるじの大臣いみじう興じ給ふ。「この
家のめいぼく、今日に侍り。ごそのたまはする。げにさる事
ご聞く人皆ほこらしくなん。」

三菊紅葉

院後嵯峨上皇位を後深草天皇に譲りて後鳥羽殿に移らせ給ふ。
 朝觀の行幸主上が上皇・母后の宮に行幸なること。通例は正月なれど、これは格別なり。
 女院後嵯峨中宮藤原姞子。後深草天皇の母后。
 太政大臣藤原實氏。女院の父。

院の上鳥羽殿におはします頃、神無月の十日頃、朝觀の行幸し給ふ。世にあるかぎりの上達部殿上人仕うまつる。いろくの菊紅葉をこきまぜて、いみじう面白し。女院もおはしませば、拜し奉り給ふを太政大臣見奉り給ふに、よろこびの涙ぞ人わろきほごなる。

ためしなき我が身よ、いかに年たけて

かゝるみゆきに今日仕へつる。

げに大方の世につけてだに、めでたくあらまほしき事ごもを、わが御末ご見給ふおごの心ちいかばかりなりけん。來し方もためしなきまで、高麗唐土の錦綾をたちかさねたり。太政大臣ばかりぞねび給へれば、裏表白き綾の下襲を着給へるしも、いごめでたくなまめかし。池にはうるはし

正月正嘉元年。
 后後深草天皇の中宮藤原公子實氏の女。
 たゞ人攝政關白ならぬ人。
 國母大宮院姞子。公子の御姉。
 おご前太政大臣藤原實氏。

くからのよそひしたる御船二艘漕ぎ寄せて、御遊さまくの事ごもめでたくのしりて歸らせ給ふ響のゆゝしさを、女院も御心ゆきて聞召す。

七 おりゐる雲

一 藤なみの影

かくて今年は暮れぬ。正月いつしか後に立ち給ふ。たゞ人の御女のかく后國母にて立ちつゞき候ひ給へる、ためしまれにやあらん。おごの御さかえなめり。御子二人大臣にておはす、公相公基ごて。大將にも左右にならびておはせしぞかし。これもためしいごあまたは聞えぬ事なる

三笠山
大和國添上郡
春日の社のあ
る山。

へし。我が御身太政大臣にて二人の大將を引具して、最勝講なりしかこよ、参り給へりし御勢のめでたさは、めづらかなる程にぞ侍りし。后國母の御親帝の御祖父にて、誠にそのうつはものに足りぬと見え給へり。昔後鳥羽院に候ひし下野の君は、さる世のふるき人にて、大臣に聞えける、

藤なみの影さしならぶ三笠山

人にこえたるこずゑこそ見る。

かへし、大臣、

思ひやれ、三笠の山の藤の花

咲きならべつゝ見つる心を。

かゝる御家のさかえを、自らもやむごごなしと思し續けて、詠み給ひける、

春雨の四方の草木をわかねども、

しげきめぐみは我が身なりけり。

八 山のもみぢ葉

一 和歌の浦

この年頃
龜山天皇の文
永二年。

元久のため

し
後鳥羽法皇親
ら新古今集を
點せさせ給
ふ。
一院
後嵯峨法皇。

まこごや、この年頃、前内大臣基爲家の大納言入道侍従二位行家・光俊の辨入道なごうけたまはりて撰歌の沙汰ありつる、只今日明日ひろまるべしと聞ゆる、面白うめでたし。かの元久のためしとて、一院みづからみかゝせ給へば、心ここに、光そひたる玉ごもにぞ侍るべき。年月にそへては愈、外ざまにわくる方なく、榮えのみまさらせ給ふ御有様のいみ

金葉集なら
では
金葉集には輔
仁親王の御名
を書かす、た
だ三宮さしる
されたるをい
ふ。
中務宮
宗尊親王。

じきに、この集の序にも、日本島根はこれ我が世なり、春の風
に徳をあふがんと願ひ、和歌の浦もまた我が國なり、秋の月
に道をあきらめん。こかや書かせ給へりける、げにぞめてた
きや。金葉集ならでは御子の御名のあらはれぬも侍らね
ご、この度はかのあづまの中務宮の御なのりぞ、書かれ給は
ざりける。いこやむごごなし。新古今の時ありしかばに
や、竟宴といふこご行はせ給ふ。いこ面白かりき。この集
をば續古今ご申すなり。

九 北野の雪

一 枯野の眞葛

右近の馬場
一條京極の
末。

此歌も下す、
右近の馬場、
一條京極の末、
末、
こ行の
く、もてし
こ、物、
れ、身、
之、の、
け、し、

親王
宗尊親王。
枯野の眞葛
續古今集に
「日影さす枯
野の眞葛霜さ
けて過ぎにし
秋にかへる霜
かな。」

雪のいみじう降りたるあした、右近の馬場の方御覽じにお
はしまして、詠ませ給ひける、
なほたのむ、北野の雪の朝ぼらけ、
跡なきこごにうつもる、身は。
なご聞えき。大方この親王の歌の聖にておはします事、皆
人の口に侍るべし。「枯野の眞葛霜さけて。」なごも人ごごに
めでの、しる御歌なるべし。されば、世をみだらむなご思
ひ寄りけるもの、ふの、この親王の御歌すぐれて詠ませ給
ふを、夜晝いごむつまじく仕うまつりける程に、おのづから
同じ心なるものなご多くなりて、宮のみけしきあるやうに
言ひなしけりこかや。

一院 後嵯峨院
 新院 後深草院
 大宮院 後嵯峨中宮
 東二條院 後深草中宮
 一つ御方 二條富小路殿
 本院 後嵯峨院
 中宮 龜山中宮
 實氏 公經
 實兼 今出川院
 實雄 京極院侍子
 (龜山皇后)

二秋の雨

秋の雨、ひごろ降りていご所せかりしに、たま〜雲間見え
 て空のけしきものすごきほごに、一院新院大宮院東二條院
 なご皆ひごつ御方におはします。御前に太政大臣公相常
 磐井入道殿實氏もさぶらひ給ふ。前の左の大臣實雄久我
 大納言雅忠なごうごからぬ人々ばかりにて、大御酒まるる。
 あまた下りながれて上下少し打亂れ給へるに、太政大臣本
 院の御盃を賜はり給ひて、もちながらごばかりやすらひて、
 「公相官位共に極め侍りぬ。中宮川院さておはしませば、も
 し皇子降誕もあらば、家門の榮華衰ふべからず。實兼もけ
 しうは侍らぬをのこなり。うしろめたくも思ひ侍らぬに、
 一のうれへ心の底になん侍る。」ご申し給へば、人々「何事にか。」

入道相國 公相の父實
 氏。この年文
 永四年十月十
 二日、公相父
 に先だちて薨
 す。
 恨の至りて
 本朝文粹後
 江相公爲三亡
 息澄明一四十
 九日願文、一弟
 子朝綱敬白、
 悲之又悲、莫
 レ悲レ於レ老後
 一レ子、恨而更
 恨莫レ恨レ於レ
 少先レ親。」

ご覺東なくおぼす。左の大^ナ大臣實雄は、中宮の御事かくのた
 まふを、いでや。ご耳にごまりて打思さるらんかし。一院、何
 事にか。ご宣ふに、しばしありて、入道相國にいかにも先立ち
 ぬべき心ちなんし侍る。「恨の至りてうらめしきは、さかり
 にて親に先立つうらみ、悲の至りてかなしきは、老いて子に
 後るゝには過ぎず。」ごこそ澄明におくれたる願文にも書き
 て侍りしか。なご申し給ひて打ちしほたれ給へば、皆いごあ
 はれに聞きおぼす。入道殿はまして墨染の御袖ぬらし給
 ひける、ごごわりなりかし。

一〇 あすか川

一峯のもみぢ葉

むくり
蒙古
御賀
後醍醐院五十
の御賀

今上
龜山天皇
若宮
後宇多天皇
六月二十六
日
文永五年
入道殿
實氏
故大臣
公相
中宮
嬪子

かやうに聞ゆる程にむくりの軍といふ事起りて御賀さ
まりぬ。人々口をしく本意なしとおぼすこと限なし。何
事もうちさましたるやうにて御修法やなにやご公家武家
たゞこのさわぎなり。されども程なくしづまりていごめ
でたし。

かくて今上の若宮六月二十六日親王の宣旨ありて同じき
八月二十五日坊に居給ひぬ。かく花やかなるにつけても
入道殿はあさましく思さる。故大臣の先立ち給ひしなげ
きに沈みてのみ物し給へごかゝる世のけしきをかしこく
見給はぬよ。とおぼしなくさむ。中宮は御服の後も参り給
はず。よろづひきかへ物うらめしげなる世の中なり。

御本意
御出家の御素
志
白河殿
山城國愛宕
郡

飛鳥川
大和國高市郡
稻淵山に發し
磯城郡初瀬川
に合す

一院は御本意遂げ給はんことをやうくおぼす。その年
の九月十三夜白河殿にて月御覽するに上達部殿上人例の
おほく参りつごふ。御歌合ありしかば内の女房ごも召さ
れて、いろくの引物源氏五十四帖のころさまの風の
流にして上達部殿上人までも分ち賜はす。院の御製

われのみや影もかはらん飛鳥川
おなじ淵瀬に月はすむごも
かねてより袖もしくれて墨染の
ゆふべいろます峯のもみぢ葉

この御歌にてぞ御本意の事おぼしきためけりご皆人袖を
しぼりて聲もかはりけり。あはれにこそ。民部卿入道爲
家判せさせられけるにも身をせめ心をくだきてかきやる

龜山殿

山城國葛野郡

新院

後深草院

白菊

表白蘇芳

青紅葉

表青裏黃

北野

山城國葛野郡

平野

同上

中務の親王

宗尊親王

中將

實冬

方も侍らず。こかや奏しけり。かくて神無月の五日龜山殿へ御幸なる。今日をかぎりの御旅なれば心ここにござのへさせ給ふ。新院も例のおはします。大宮東二條ひこつ御車にておなじく渡らせ給ふ。大宮女院は白菊の御衣、東二條院は青紅葉の八菊の御小袷たてまつる。まづ北野平野の社へ御まゐりあれば、御隨身ごも花を折りつくし、今日をかぎりご様あしきまでさうぞきあへり。兩社にて馬あげさせられけり。神もいかに名残おほく見給ひけん。空さへうちしぐれて木の葉さそふ嵐も折知顔に物悲しう涙あらそふ心ちし給ふ人々多かるべし。中務の親王、今日のたもごさぞしぐるらん。このたまひし御かへし、中將、

青蓮院の法親王

尊助親王

本院

後深草院

御身の宿世

文永十一年正月二十六日龜山天皇讓位後宇多天皇踐祚。後深草院の御子孫の皇位を繼ぎ給はぬを宿世ありさなり。

袖ぬらす今日をいつかご思ふにも

しぐれてつらき神無月かな。

やがてその夜御ぐしおろし給ひぬ。御戒の師には青蓮院の法親王まゐり給ふ。

一一 草まくら

一 うるほふ袖

本院は猶いごあやしかりける御身の宿世を人の思ふらん事もすさまじう思しむすぼゝれて、世をそむかんのまうけにて尊號をもかへし奉らせ給へば、兵仗をもごめんとて御隨身ごも召して祿かつげ暇賜はするほど、いご心細しご

故院
後睦院
東の御方
後深草院の妃
惜子、伏見天
皇の御母。

思ひ合へり。大方の有様うち思ひ廻らすもいと忍び難き事多くて内外の人々袖ごもうるひわたる。院もいと哀なる御けしきにて心づよからず。今年三十三にぞおはします。故院の四十九にて御ぐしおろし給ひしをだに、さこそは誰もく、惜み聞えしか。東の御方もおくれ聞えじご御心づかひし給ふ。さならぬ女房上達部の中にもごりわきむつまじうつかまつる人三四人ばかり、御供つかまつるべき用意すめれば、ほごくにつけて私も物心細う思ひ歎く家々あるべし。

かゝる事ごもあづまにも聞え驚きて、例の陣のさだめなごやうにこれかれ數多武士ごも寄り合ひ寄り合ひ評定しけり。この頃はありし時頼朝臣の子時宗相模守ごいふぞ世

の中はからふぬしなりける。故時頼朝臣は康元元年に頭おろして後、しのびて諸國を修行しありきけり。それも國の有様人の愁なご、委しくあなぐり見聞かんのはかりごごにてぞありける。あやしの宿りに立寄りてはその家ぬ



北條時頼
京都萬壽寺藏

しが有様を問ひ聞き、理ある愁なごの埋もれたるを聞きひらきては、我はあやしき身なれご昔よろしき主をもち奉りて、いまだ世

にやおはするご消息奉らん。もてまうで、聞え給へ。なごいへば、なごふ事なき修行者の何ばかりかは。ごは思ひながら、言ひ合せてその文もちてあづまへ行き、しかくご教

本院
後深草院
故院
後嵯峨院



北條肥後満願寺藏
時宗

へしまゝに言ひて見れば、入道殿の御消息なりけり。「あな
かまく」さて永き愁なきやうにはからひつ。佛神などの
現れ給へるかさて皆額をつきて悦びけり。かやうの事す
べて數知らずありしほ
ごに國々も心づかひを
のみしけり。最明寺入
道ごぞいひける。
その子なればにや今の

新院
龜山院
十一月五日
建治元年

三月
後宇多天皇弘
安二年
持明院殿
上立賣の北
新町の西

なくはものし給ふべき。いごたいくしきわざなり。さて
新院へも奏し、彼方此方なだめ申して、東の御方の若宮を坊
に立て奉りぬ。十一月五日節會行はれていごめでたし。
かゝれば少し御心なくさめて、この際はしひてそむかせ給
ふべき御道心にもあらねば、思しこゝまりぬ。これぞある
べき事ごあいなう世の人も思ひいふべし。

一二 老のなみ

一 花の白雪

三月の末つ方、持明院殿の花盛に新院わたり給ふ。鞠の
かり御覽ぜんごなりければ、御前の花は梢も庭もさかりな

新院
龜山院
 故院
後嵯峨院
 本院
後深草院
 朱雀院
三條の北
 雀の西

るに、よその櫻をさへ召して、あらし添へられたり。いと深
 うつもりたる花の白雪跡つけがたう見ゆ。上達部殿上人
 いと多く参り集り、御隨身北面の下臈などいみじうきらめ
 きて候ひ合へり。わざとならぬ袖口ごもおし出されて、心
 ここに引きつくろはる。寢殿の母屋に御座おまし對座に設けら
 れたるを新院入らせ給ひて、故院の御時定めおかれしうへ
 は、今更にやは。さて長押の下へひきさげさせ給ふほごに、本
 院出で給ひて、朱雀院の行幸にあるまじの座をこそなほさ
 れ侍りけるに、今日の御幸には御座をおろさるゝいごここ
 やうに侍り。なご聞え給ふほごいご面白し。うべくしき
 御物語はすこしにて、花の興にうつりぬ。
 御かはらけなごよき程の後春宮院伏見おはしまして、かゝり

まらうどの
 院
龜山院
 したうづ
 下ぐつ。磯。
 久我の太政
 大臣
通光
 權櫻
表蘇芳 裏赤
 花。
 山吹
表薄朽葉 裏
 黄。

の下に皆立出で給ふ。兩院春宮立たせ給ふ。半過ぐるほ
 ごに、まらうどの院のぼり給ひて御したうづなごなほさる
 るほごに、女房別當の君また上臈だつ久我の太政大臣のう
 まごこかや權櫻の七、紅のうち衣、山吹のうはぎ、赤色の唐衣、
 すゝしの袴にて、しろがねの盃、柳筥にすゑて、同じひさげに
 て柿ひたしまるらすれば、はかなき御たはぶれなご宣ふ。
 暮れかゝる程、風すこし打吹きて花もみだりがはしく散り
 まがふに、御鞆數多くあがる。人々の心ちいごえんなり。
 ゆゑある木蔭に立ちやすらひ給へる院の御かたちいごき
 よらにめでたし。春宮もいと若うつくしげにて、濃き紫
 の浮織物の御指貫なよびかにけしきばかり引きあげ給へ
 れば、花のいと白く散りかゝりて、紋のやうに見えたるもを

かし。御覽じあげて一枝おし折り給へるほど、繪にかゝまほしき夕ばえごもなり。その後も御みきなごらうがはしきまで聞召しさうごきつゝ、夜更けて歸らせ給ふ。

二かみ風

その頃蒙古おこるごかやいひて世の中さわぎ立ちぬ。いろいろさまぐに恐しう聞ゆれば、本院新院はあづまへ御下りあるべし。内春宮は京にわたらせ給ひて東の武士ごも上り候ふべし。なご沙汰ありて、山々寺々御祈數知らず。伊勢の勅使に經任大納言まるる。新院も八幡へ御幸なりて西大寺の長老召されて眞讀の大般若供養せらる。大神宮へ御願に、我が御代にしもかゝる亂出で來て、誠にこの日

その頃
弘安四年。

内
後宇多天皇

春宮

伏見天皇

西大寺

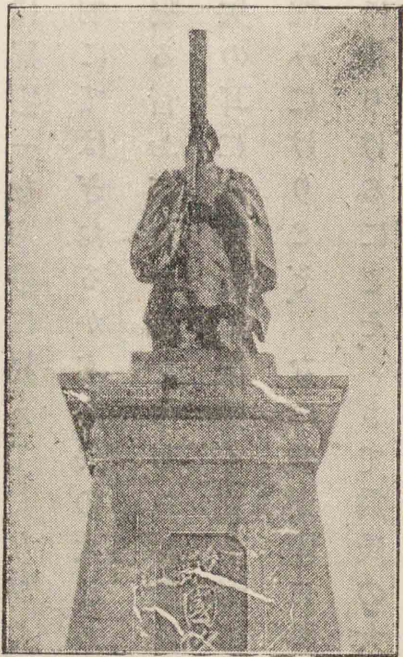
奈良の西にお

り。

大般若
六百卷。唐玄
非譯。

大宮院
姞子。

本のそこなはるべくは御命を召すべきよし御手づから書かせ給ひけるを、大宮院いごあさましき事なり。ごなほ諫め聞えさせ給ふごごわりにあはれなる。東にも言ひ知らぬ祈ごもこちたくののしる。故院の御代にも御賀の試樂の頃かゝる大事ありしかご程なくこそしづまりにしを、この度はい



龜山上帝銅像

ごにがくしう牒状ごかやもちて參れる人なごありて、わづらはしう聞ゆれば、上下思ひ惑ふごご限なし。されごも七月一日夥しき大風吹きて異國の船六萬艘、兵乗

りて筑紫へよりたる、皆吹き破られぬれば、或は水に沈み、おのづから残れるも泣くく、本國へ歸りにけり。石清水の社にて大般若供養說法いみじかりける刻限に、晴れたる空に黒雲一むら俄に見えてたなびく。かの雲の中より白き羽にてはぎたるかぶら矢の大なる、西を指して飛び出で、鳴る音おびたゞしかりければ、彼處には大風の吹きくるこ兵の耳には聞えて、浪荒く立ち、海の上あさましくなりて皆沈みにけりこそ。なほ我が國に神のおはします事あらたに侍りけるにこそ。さて爲氏の大納言伊勢の勅使にてのぼる道より申しおくりける、

勅をしていのるしるしの神風に

寄せくる浪ぞかつくだけつる。

かくて静まりぬれば、京にも東にも御心ごもおちるて、めでたさかぎりなし。かの異國の帝心うしごおぼして湯水をも召さず、われいかにもしてこの度日本の帝王にうまれて、かの國をほろぼす身ごならん。ごぞちかひて死に給ひけるごぞ聞き侍りし。まここにやありけん。

一三 今日の日影

一 窓のほたる

この中將才かしこくて、末の世にはこここの外にもてなされて、まづ一品してしばしおはせし頃、御百首の歌に、

位山のぼりはてゝも峯におふる

中將
源有房
位山
飛騨國

松にこゝろをなほのこすかな。
さてつひに内大臣までのぼられき。さて嘉元（一）のころかこ
よ、百首歌奉りし中に、

あつめこし窓の螢の光もて

おもひしよりも身をてらすかな。

ご詠まれ侍りき。有房ご聞えしが若くての世のこごなる
べし。

一四 つげの小櫛

一 秋ぎりの空

かくて又の年春の頃より東二條院御惱日々におもり給ひ

又の年
嘉元二年
東二條院
後深草中宮藤
原公子。

伏見殿
山城國紀伊
郡。

法皇
後深草院。

御孫の春宮
花園天皇。

て今はご見えさせ給へば、伏見殿へ出でさせ給ひて、遂にう
せさせ給ひぬ。七十にあまらせ給へば、こごわりの御事な
り。法皇もその御なげきの後をさく物聞召さずなごあ
りしをはじめにて、打續き心よからず御わらはやみなご聞
ゆる程に、七月十六日二條富小路殿にてかくれさせ給ひぬ。
六十二にぞならせ給ひける。いごあはれに悲しき事ごも
いへば更なり。御孫の春宮もひごつにおはしましたつれば、
急ぎて外へ行啓なりぬ。御修法の壇ごもこぼくご毀ち
て、くづれ出づる法師ばらのけしきまで、今をかぎりごごち
めはつる世の有様いごかなし。宵過ぐるほごに六波羅の
貞顯憲時二人御ごぶらひに参れり。京極おもての門の前
に床子にしりかけてさぶらふ。随ふものごも左右になみ

深草殿
山城國紀伊郡

院
伏見院

遊義門院
後宇多院皇后
始子
よご、もの
涙
古今集 貫之
「よご」もに
流れてぞ行く
涙川冬もこほ
らぬ水泡なり
けり」

みたるさまいごよそほしげなり。
又の日夜に入りて深草殿へゐてわたし奉る。御車さしよ
せて御くわん乗せ奉るほど、うちごよみ合ひたるいごこご
わりに、心をさむる人もなし。院の御前宮だちなご藁履ご
かやいふもの奉りて門まで御送つかうまつらせ給ひて、ご
みにもえのぼらせ給はず、御直衣の袖をおしあて、遙に程
經てぞ御車にたてまつりて伏見殿への御おくりもせさせ
給ひける。院のうちゆゝしきまで泣き合へり。後深草院
ごぞ聞ゆる。御日數のほごは伏見殿に宮たち遊義門院な
ごおはします。秋さへ深くなり行くまゝに、よご、もの御
涙ひる間なくおぼしまごふ。遊義門院、
物をのみ思ひねざめにつくづくご

みるも悲しきごもし火の色。
春きてしかすみの衣ほさぬまに
こゝろもくるゝ秋ぎりの空。

二 つたもみぢ

院の二の御
子
後醍醐天皇
御母
藤原忠子。後
宇多院典侍。
法皇
龜山院。嘉元
三年九月十五
日崩御。
ごなせの瀧
大井川の上流
にありて龜山
殿より程近
し。

院の二の御子の御母、忠繼の宰相のむすめ、今は准后ご聞ゆ
る御腹におはします。この頃帥の宮ご聞ゆるを法皇ごり
わけ御傍さらずならはし奉り給ひて、いみじうらうたがり
聞えさせ給ひしかば、人より殊におぼし歎くべし。頃さへ
しぐれがちなる空のけしきに、山の木の葉も涙あらそふ心
ちしていごかなし。處がらしもいごゝあはれをそへたり。
川浪のひゞき、ごなせの瀧の音までもごり集めたる御心の

内親王
非子。

中ごもなり。御日數のほどは帥の宮、ひこつ御腹の内親王
なごもこの院におはしますほど、つれづれなるまゝにはか
なし事なご聞えかはして、花紅葉につけてもむつまじくな
れ聞え給ふへし。

大多勝院
龜山殿の中に
あり。

帥の御子は大多勝院の西の廂にわたらせ給ふ。御前の松
の木に這ひかゝれる蔦の紅葉のいたう染めこがしたるを
ごりて、長月三十日の夕つ方昭訓門院の御方へ奉らせ給ふ。
あすよりの時雨もまたで染めてけり、

袖のなみだや蔦のもみぢ葉。

木の葉よりもろき御涙はましていごせきかね給へりし。
御かへし、
よもは皆涙の色に染めてけり、

昭訓門院
龜山院の御妃
藤原瑛子。

そらにはぬれぬ秋のもみぢ葉。

あはれに見奉らせ給ひつゝ、名残もいみじくながめられて、
高欄におしかゝり給へる夕ばえの御かたあいごめでたし。
ありつる紅葉を西園寺大納言公顯のこのる所へつかはす。
雨ごふるなみだの色やこれならん、

袖より外にそむるもみぢ葉。

女院
瑛子。

女院の御せうごなれば、しめやかなる御山すみの心苦しさ
にさぶらひ給ふなりけり。御返事、

いづくもみぢ葉の涙の色をそめつらん、

今日をかぎりの秋のもみぢ葉。

時雨はしたなく風あらゝかに吹きて暮れぬれば、宮うちに
入り給ひて御殿油ちかくめして、晝御覽じさしたる御經な

ご讀み給ふほごに、若殿上人ごも打連れてこなたの御ごの
ゐに参れり。晝の蔦の葉のちりほひたるを人々見るに、宮
「それにおのゝ歌書きて。」ご宣へば、中將爲藤朝臣、
もみち葉になくねはたえず、空蟬の

からくれなるも涙ごや見ん。

清忠朝臣、

山姫の涙の色もこのごろは

わきてやそむる蔦のもみち葉。

光忠朝臣、

世の中のなげきの色をしらねばや、

こぞにかはらぬ蔦のもみち葉。

これらをごりあつめて北殿の内親王の御方へ奉らせ給ひ

ければ、

さすがなほ色は木の葉に残りけり、

かたみもかなし秋の別路。

雨うちそぎてけはひあはれなる夜いたう更けて、帥の宮
例の北殿へ参り給へれば、姫宮も御殿ごもりぬ。候ふ人々
も皆しづまりぬるにや、格子なごたゝかせ給へごあくる人
もなければ、空しく歸らせ給ふごて、書きてさしはさませ給
ふ。

おのづから眺めやすらむ、ごばかりに

あくがれきつるありあけの月。

御かへし、この日、

いたづらに待つよひすぎし村雨は

おもひぞたえし、ありあけの月。

一五 うら千鳥

一 むなしき名

院の上
伏見院
正應に
爲兼卿謀反の
きこえありま
て。關東より
の沙汰にて佐
渡へ流され、
御門もやがて
御讓位ありし
をいふ。

院の上さばかり和歌の道に御名たかくいみじくおはしま
せば、いかばかりかと思されしかども、正應に撰者ごもの事
ゆゑに煩ごもありて撰集もなかりしかば、いこゝ口惜しう
思されて、

我が世にはあつめぬ和歌の浦千鳥、

むなしき名をやあこに残さん。

なご詠ませおはしましたりしを、今だに、「急ぎたゝせ給ひ

行成大納言
攝政伊尹の
孫。道風・佐
理と共に書を
以て三賢と稱
せらる。

て、爲兼の大納言うけたまはりて、萬葉よりこなたの歌ごも
集められき。正和元年三月二十八日奏せらる。玉葉集ご
ぞいふなる。

この爲兼の大納言は爲氏の大納言の弟に爲教右兵衛督ご
いひしが子なり。かぎりなき院の御おぼえの人にて、かく
撰者にもさだまりにけり。そねむ人々多かりしかご、さは
らんやは。この院の上好みよませ給ふ御歌の姿は、前藤大
納言爲世の心地にはかはりてなんありける。御手もいご
めでたく、むかしの行成大納言にもまさり給へるなご時の
人申しけり。やさしうも強うも書かせおはしましけりご
かや。

一六 秋のみ山

一 かたぶく月

院 後宇多院。
 内 後醍醐天皇。
 上 後宇多院。
 萩の戸 清涼殿夜の御殿の北にありて、二間に一間なり。又菊の戸さもいへり。
 春日の御櫛 春日大明神の神靈のやざります櫛。

院にも内にもあさまつりごこのひまには、御歌合のみしげう聞えし中に、元享元年八月十五夜かこよ常より殊に月おもしろかりしに、上萩の戸に出でさせ給ひて、ごなる御遊などもあらまほしげなる夜なれど、春日の御櫛うつし殿におはします頃にて、絲竹のしらべは折悪しければ、例の只内内御歌合あるべしごて、侍従の中納言爲藤召されて、俄かに題たてまつる。殿上に候ふかぎり左右同じほどの歌よみをえらせ給ふ。左内の上春宮大夫公賢左衛門督公敏侍従中納言爲藤中宮權大夫師賢宰相惟繼昭訓門院の春日女爲世右は藤大納言爲世富小路大納言實教洞院中納言季雄公修

筆蹟 除目折紙進二覽之候關東任人許任レ之候也兼又僧官所望之輩追到來注ニ進之候恐惶謹言十二月廿九日 尊治
 安福殿 承明門内の西にありて、春興殿ニ相對す。
 無名門 殿上の間より小板敷を下り紫宸殿に至る土廊にあり。
 右近の陣 校書殿と安福殿との間なる月華門の中にあり。

宰相實任少將内侍佐爲
 女・忠定朝臣爲冬忠守
 なごいふ醫師もこの道のすきものなりごて召し加へらる。衛士のたく火も月の名だてにやごて、安福殿へ渡らせ給ふ。忠定中將晝の御座の御はかしをさりて参る。殿上のかみの戸を出でさせ給ひて、無名門より右近の陣の前を過ぎさせ給へば、

除目折紙色
 湯ん之ハ關東任人
 侍中亦不令一守
 正印年時色之
 作上侍候
 三月廿九日 尊治

(寶墨微史) 筆宸御皇天嗣醍後

鏡鈔本

六

遣水に月のうつれるいとおもしろし。
安福殿の釣殿に床子立て、東面におはします。上達部は



後醍醐天皇 (山城國大德寺藏)

篋子の高欄にせなかおし
あてつゝ、殿上人は庭に候
ひ合へるもいごえんなり。
池の御船さしよせて左右
の講師隆資爲冬乗せらる。
御みきなごまるるさまも、
うるはしきことよりは艶
になまめかし。人々の歌
いたくけしきばみて、ごみ
照る月なみもくもりなき
にも奉らず。いご心もごなし。

照る月なみ
源順「水の上
にてる月なみ
をかぞふれば
今宵ぞ秋のも
なかなりけ
る。」

池の鏡に、いはねごしるき秋のなかはげにいごことなる空
のけしきに、月もかたぶきぬ。明方ちかうなりにけり。う
への御製、

鐘の音も傾く月にかこたれて、

をしご思ふ夜はこよひなり亮

ご講じあげたるほど、景陽の鐘もひびきをそへたる折柄、い
みじうなん。いづれもけしうはあらぬ歌ごも多く聞えし
が、御製の鐘の音にまされるはなかりしにや。かくて今年
もまたくれぬ。

景陽の鐘
時の鐘。景陽
はもさ支那南
齊武帝の宮中
にありし鐘樓
の名。

一七 春のわかれ

一七 春のわかれ

おのゝかま白ま
乙卯之
まか磨ん
まか磨ん

一 いかならん時

長月ばかり
正中元年九月
十九日

その頃長月ばかりまだしの、めの程に世の中いみじくさ
わぎの、しる。「何事にか。」と聞けば美濃國の兵にて土岐の
十郎ごかやまた多治見の藏人などいふ者ごも忍びのぼり
て四條わたりに立ちやどりたる事ありて人にかくれてを
りけるを早う又告げ知らするものありければ俄かにその
所へ六波羅より押寄せて搦め捕るなりけり。あらはれぬ
ごや思ひけんかのものごもはやがて腹切りつ。又別當資
朝藏人内記俊基同じやうに武家へごられてきびしくたづ
ねごひ守りさわぐ。事のおこりは御門世をみだり給はん
ごてかの武士ごもを召したるなりごといひあつかふめる
さてその宣旨なしたる人々ごてこの二人をもあづまへ下

御門
後醍醐天皇

故院
後宇多院

正應にも
伏見天皇正應
三年三月九日
淺原爲頼ごい
へる武士禁中
に濫入せるを
いふ。

していましむべしごぞ聞ゆる。いかさまなる事の出でく
べきにかごいごおそろしくむづかし。「故院おはしまし、
程は世も長閑にめでたかりしをいつしかかやうの事ごも
出できぬるよ。」人の口やすからざるべし。正應にも淺原
ごいひしさわぎは後嵯峨院の御そうぶんを東よりひき違
へし御恨ごこそは聞えしか。今もその御憤の名残なるべ
し。過ぎにし頃資朝も山伏のまねびして柿の衣にあやる
笠ごいふもの着て東の方へ忍びて下れりしは少しはあや
しかりし事なり。はやうかゝる事ごもにつけてあなたご
まにも宣旨をうくるもの、ありけるなめり。俊基も紀伊
國へゆあみに下る。などいひなして田舎ありきしげかりし
も今ぞ皆人思ひ合せける。

C32 =

親資通
 さるまゝには言ひ知らず聞ゆる事ごもあれば、まだきに、い
 ご口惜しう思されて、この事をまづおたしくやめんごおほ
 せば、かの正應にありしやうなる、ちかひの御消息をつかは
 す。宣房の中納言、御使にてあづまに下る。大かた古き御
 世よりつかへきて年も、たけたる上、この頃は天下にいさぎ
 よく、うべくしき人に思はれたる頃なれば、この事更に御
 門のしろし召さぬよしなご、けさやかに言ひなすに、荒きえ
 びすごもの心にも、いご忝き事ごなごみて、無異なるべく奏
 しけり。この御使の賞にや宣房、大納言になされぬ。いご
 いみじき幸なり。親は三位ばかりにて入道してき。子ご
 もなごさへいご清げにてあまたあめり。さればおほやけ
 はしろし召されぬにても、かの人々は遁るべき方なしにて、

別當は佐渡國へ流されぬ。俊基はいかにして遁れぬるに
 か、都にかへりぬれごありしやうには出でつかへず、籠り居
 たるよしなり。かやうにて事なく静まりぬれば、いごめで
 たけれご、上の御心のうちは猶安からず、いかならむ時ごの
 みおもほしわたるべし。

一八 むら時雨

一 闇のうつゝ

つゝむごすれご事廣くなりければ、武家にも早う漏れ聞
 えて、さにごそあなれご用意す。「まづ九重をきびしくかた
 め申すべし。」なごさだめけり。かくいふは元弘元年八月二

平王の御政の外人民の御をさうれる 齒

本殿
常の御所にて
清涼殿なり。

中宮
祿子。

二條院の昔
平治の亂に、
二條天皇・後
白河上皇信賴
の爲に幽閉せ
られ給ひし
か、經宗・惟方
等相謀りて、
天皇に女房の
裝束を召させ
奉り、あやし
き車に乗せ奉
りて、藻壁門
より忍び出だ
し奉りしをい
ふ。

十四日なり。雜務の日なれば記録所におはしまして、人の
争ひうれふる事ごもを行ひくらさせ給ひて、人々もまかで、
君も本殿にしばし打休ませ給へるに、今夜既に武士ごもき
ほひ参るべし。ご忍びて奏する人ありければ、ごりあへず雲
の上を出でさせ給ふ。中宮の御方へ渡らせ給ひても、しめ
やかにあらず、いごあわたし。かねて思し設けぬには
あらねごも、事のさかさまなるやうになりぬれば、よろづう
きくご我も人もあきれるたり。内侍所神璽寶劔ばかり
をぞ忍びてゐて渡らせ給ふ。うへはなよらかなる御直衣
たてまつり、北の對よりやつれたる女車のさまにてしのび
出でさせ給ふ。かの二條院の昔もかくやご思ひ出でらる。
日頃の御用意にはまづ六波羅を攻められんまぎれに、山へ

法親王たち

尊雲・尊澄の
二皇子。

坂本

近江國滋賀郡
比叡山の麓に
あり。

中務の宮
尊良親王。

闇のうつ、
古今集「うづ
玉の闇のうつ
つはさやかな
る夢にいくら
もまさらざり
けり。」

行幸ありて、彼處へつはものごもを召して、山の衆徒をも相
具し、君の御かためごせらるべし。ご定められければ、かの法
親王たちもその御心して坂本に待ち聞え今ひけれご、今は
かやうに事違ひぬればあへなしごて、俄かに道をかへて奈
良の京へぞ赴かせ給ふ。中務の宮も御馬にて追ひて参り
給ふ。九條わたりまで御車にて、それより御門もかりの御
衣にやつれさせ給ひて、御馬にたてまつるほごごはいかに
しつる事ぞ。ご夢の心ちしておぼさる。御供に按察大納言
公俊萬里小路中納言藤房源中納言具行四條中納言隆資な
ごまゐれり。いづれもあやしき姿にまぎらはして、暗き道
をたごりおはするほご、げに闇のうつ、の心ちして、我にも
あらぬさまなり。

木幡山 山城國宇治郡 宇治の北方にあり。
木津 山城國相樂郡。
東南院 奈良にあり。僧正は聖壽、關白基忠の子。
鷲峰山 山城國相樂郡和束郷。
笠置寺 山城國相樂郡。

丑三ばかりに木幡山過ぎさせ給ふ。いごむくつけし。木津こいふわたりに御馬ごめて、東南院の僧正のもこへ御消息つかはす。それより御輿を参らせたるに奉りて、奈良へおはしましたつきぬ。こゝに中一日ありて二十七日わづかの鷲峰山へ行幸ありけれども、其處もさるべくやなかりけん、笠置寺こいふ山寺へ入らせ給ひぬ。「所のさまたやすく人の通ひぬべきやうもなく、よろしかるべし。」とて、木丸殿のかまへを始めらる。これよりぞ人々すこし心ち取静めて、近き國々の兵ごも召しに遣す。

二 ありあけの月

坂本には行幸を待ち聞え給ひけるに引きたがへ、南ざまへ

筆蹟

今度所願令成就者於三丹生明神之寶前以二十二禪侶可始長日不斷之護摩一且如舊可尊三人法佛法紹隆一仍所立願一狀如レ件
元弘貳年十一月廿五日
二品親王花押

おはしましぬれば、その由衆徒に聞かれなばあしかりぬへし。又ごまれかくまれまここのおはします所をさうなく武家へ知らせじ。のたばかりにやありけん、花山院の大納言師賢を山へつかはして、忍びて御門のおはします由にもてないて、かの兩法親王事行ひ給ひつゝ、六波羅のつはものごものかこみを防がせ給

(寶墨微史) 蹟筆王親良護

ふ。その日は大納言も大塔の前座主の宮もうるはしきも

妙法院の宮
尊澄法親王

志賀の浦
近江國志賀郡

のふ姿にいでたせ給ふ。卯花緘の鎧に鋏形の兜たてまつり、大矢負ひてぞおはする。妙法院の宮はすゞしの御衣の下に萌黄の腹巻をかや着給へり。大納言はからの香染の薄物の狩衣にけちえんに赤き腹巻をすかして、さがに巻繪の細太刀をぞ佩き給ひける。六波羅より、御門こにおはしますこ心得て武士ごも多くまゐり圍む。山法師も戦ひなごして、海東ごかやいふつはもの討たれにけり。「事のはじめに東失せぬるめでたし。なごぞいふめる。かゝれごも御門笠置におはしますよし程なく聞えぬれば、謀られ奉りにけり。さて、山の衆徒もせうせう心がはりしぬ。宮々も逃げ出で給ひて笠置へぞまうで給ひける。大納言は都へまぎれおはすこて夜深く志賀の

浦を過ぎ給ふに、有明の月隈なく澄みわたりて寄せ返る浪の音もさびしきに、松吹く風の身にしみたるさへごりあつめ心細し。

思ふ事なくてぞ見まし、ほのくご

ありあけの月の志賀の浦波。

その後辛うじてぞ笠置へは辿り参られける。かやうの事ごも、例のはや馬にてあづまへ告げやりぬ。

三 思はぬ山の紅葉

笠置殿には大和河内伊賀伊勢なごより兵ごも参りつごふ中に、事の始より頼み思されたりし楠木兵衛正成ごいふものあり。心猛くすくよかなるものにて、河内國におのが館

筆蹟
祈禱卷數賜了
種々御祈念返
々爲悦候恐
々謹言
十二月九日
左衛門少尉
正成花押
謹上金剛寺三
綱御返事

のあたりをいかめしくしたゝめて、このおはします所もし
危からん折は行幸をもな
し聞えんなご用意しけり。
あづまのえびすごも、や
うく攻め上るよし聞ゆ。
もごより京にある武士ご
も、我先にこきほひ参る。
木丸殿にはさこそいへむ
ねくしきものなし。い
かになり行くべきにか。こ
いご心細く思し亂る。我
が御心もての御事なればかこつ方なけれど、故郷の空もあ

祈禱卷之教物
後、沖新念
吾悦の心
音々、身々、
金剛寺三綱御返事

(寶墨徵史) 蹟筆成正木楠

はれに思し出でらる。秋も深くなり行くまゝに、山の木の
葉のうちしぐれ、谷の嵐のおごづるゝも、あだのきほふかご
肝を消す御すまひ、いつしか御身をかへたる心ちし給ふも
あぢきなし。

うかりける身を秋風にさそはれて、

思はぬ山のもみちをぞ見る。

既にあづまの武士ごも雲霞のいきほひを棚曳かし上るよ
し聞ゆれば、笠置にもいみじう思しさわぐ。もごよりいご
嶮しき山のつゝらをりを、えも言はず木戸逆茂木石弓など
いふ事ごもしたゝめらる。さりごもたやすくは破れじご
頼ませ給へるに、後の山より御かたきごも崩れ参りて、木戸
ごも焼き拂ひ、おはしますあたり近く既に煙もかゝりけれ

座主の法親王
尊澄法親王

ば、今はいかんせんにて、あやしき御姿にやつれて辿り出でさせ給ふ。座主の法親王御手をひき奉り給へるも、いごはかなげなる御有様なり。

中務の御子大塔の宮などは、かねてより此處を出でさせ給ひて、楠木が館におはしましてけり。行幸も其方さまにやこ

思しこゝろざして、藤房具行兩

中納言師賢の大納言入道手を

さりかはしてほのほの中を免

れ出づる程の心ちごも、夢ごだ

に思ひも分かず、いごあさまし。

少しのびさせ給ひてぞ、御馬たづね出で、君ばかりたてまつりぬれど、習はぬ山路に御心ちもそこなはれて、誠にあや



多賀の山
山城國綴喜郡

宇治
山城國久世郡

ふく見えさせ給へば、多賀の山といふわたりにしばし御心ちをためらふ所に、山城國の民にて深須の五郎入道とかいふもの参りかゝりて、案内聞えたるしもいごめさましよう口惜し。上達部思ひやる方なくて、只目を見かはして、いかさまにせむ。ごあされたるに、東より上れる大將軍にて陸奥國の守貞直といふもの大勢にて参れり。今はたごもかくも宣はすべきやうなければ、遂にかひなくて、敵の爲に御身をまかせぬるさまなり。

やがて宇治に行幸あるべきよし奏すれば、御心にもあらでひかされおはします程に、心うしごいふものめなり。具行藤房忠顯少將など、やがておのが手のものごもに隨へさせつ。大納言入道御馬のしりに走りおかれて、此處彼處の

岩かけ木のもごに休みつゝ、ごかくためらふ程に、それも見つけられてごられぬ。君をば宇治へ入れ奉りて、まづ事の由六波羅へ聞ゆる程に、一二日御逗留あり。かくいふは九月三十日なれば、空のけしきさへ時雨がちに涙もよほし顔なり。平等院の紅葉御覧じやらるゝも、かゝらぬ行幸ならば、ごあへなし。後冷泉院かごよ、此處に行幸し給ひて三四日おはしましける、その世の人の心ち上下何事かはごうらやましくあはれに思さる。

兩院
後伏見院・花
園院
春宮
量仁親王

十月三日都へ入らせ給ふも思ひしにかはりて、いごすさまじげなる武士ごも、衛府のすけの心ちして御輿近く打圍みたり。鳳輦にはあらぬ網代輿のあやしきにぞたてまつれる。六波羅の北なる檜皮屋ひだかには、もごより兩院春宮おはし

ませば、南の板屋のいごあやしきに御しつらひなごしておはしまさするも、いごほしうかたじけなし。間近き程によろづ聞召し御覧じふるゝ事ごごにつけても、いかでか御心動かぬやうはあらん。口惜しう思し亂る。ならばぬ御やごりに時雨の音さへはしたなくて、

まだなれぬ板屋の軒の村時雨

音を聞くにも濡るゝ袖かな。

一九 久米のさら山

一この宿

かの承久のためしにごや、あづまよりの御使にて長井の右

馬助高冬といふものなるべし、これは頼朝の大將の時より鎌倉に重きものゝふにて、いまだ若けれどもかゝる大事にものぼせけるごぞ申しける。遂に隱岐國へうつし奉るべし。さて、三月の初の七日に都を出でさせ給ふ。今はご聞召す御心惑ごもいへば更なり、所々のなげき近うつかうまつりし人々の心地ごもおき所なく悲し。御門もかぎりなく御心惱むべし。いごかうしも人に見えじごかつは思し静むれご、あやにくにすゝみ出づる御涙をもてかくしつゝおはします。ふりにし事を思し出づるにも、立ちかへり復世をやすく思さむごこのいごかたければ、よろづ今をごちめにこそご思し廻らすに、人やりならず口惜しきちぎり加はりける前の世のみぞ盡きせずうらめしき。

つひにかく沈み果つべき報あらば、

上なき身ごはなに生れけん。

巳の時ばかりに出でさせ給ふ。網代の御車に御前ごもなごは、故院の御世より仕う奉りなれにしものごもあるかぎり参れり。御車寄に西園寺中納言公重さぶらひ給ふ。うへは御冠に世のつねの御直衣指貫、白綾の御衣一襲たてまつれり。去年の今日は北山にて花の宴させ給ひしも哀に思し出でられて、その日の事かさつらねこひしく思さる。人々の祿にこそは賜はせしを、今日は御旅衣にたちかふるも、哀にさだめなき世のならひ、今更こゝろうし。御車にたてまつるごて、日頃おはしましつる傍の障子に書きつけさせ給ふ。

故院
後宇多院

北山
山城國葛野
郡

いさ知らず、尙うき方の又もあらば、

この宿ごても俵ばれやせん。

和田の岬
攝津國兵庫よ
り南出せる
角。

菟藻川

同國志田郡

須磨

同國八田郡

ふきこゆる

旅人は袂す

しくなりにけ

り、關吹きこ

ゆる須磨の浦

風。

鳴く音にま

がふ

源氏物語「ま

ひわびて鳴く

音にまがふ浦

波は思ふかた

より風や吹く

らん。」

鹽屋・垂水

共に播磨國明

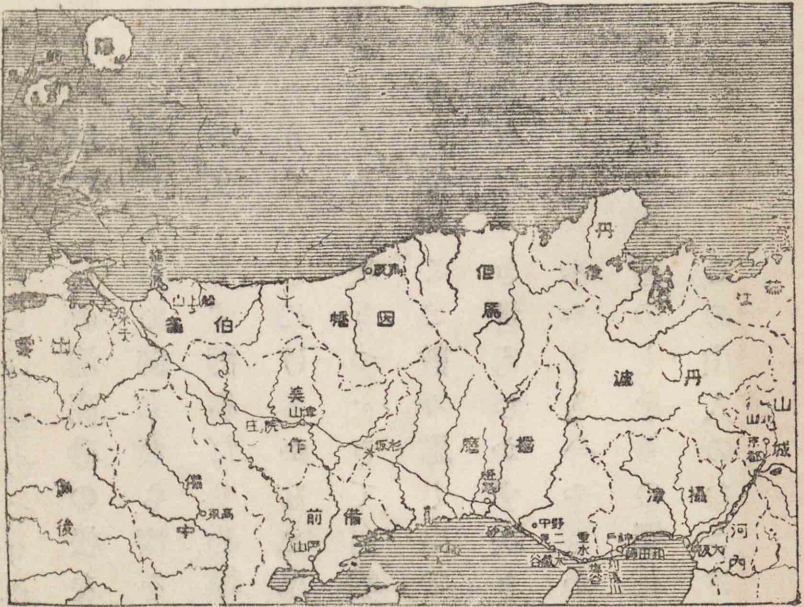
石郡

二水の泡

御門は和田の岬菟藻川を打渡して須磨の關にかゝらせ給ふ。かの行平の中納言「關ふきこゆる」と言ひけんは、浦よりをちなるべし。あはれに御覽じわたさる。源氏の大将の「鳴く音にまがふ」このたまひけん浦波、いまもげに御袖にかかるこゝちするも、さまざま、御涙のもよほしなり。播磨國につかせ給ひて、鹽屋垂水といふ所をかしきを問はせ給へば、「さなん」と奏するに、名を聞くよりからき道にこそ。ご宣はせて、さしのぞかせ給へる御さまかたち、ふりがたくなまめ

大藏谷
今の明石。

島がくれ行
く船
古今集 人麿
「ほのくく
明石の浦の朝
霧に島がくれ
行く船をしぞ
思ふ。」



一九 久米のさら山

かし。けちかき限は、あはれにめでたうもご思ひ聞ゆべし。大藏谷といふ所少し過ぐるほどにぞ人麿のつかはありける。明石の浦を過ぎさせ給ふに、島がくれ行く船ごもほのかに見えてあはれなり。

水の泡の
消えてうき世を

わたる身の

野中の清水
播磨國明石郡
二見の浦
同國加古郡
高砂の松
同國同郡

うらやましきは蟹のつり舟。

野中の清水二見の浦高砂の松など名ある所々御覽じわた
さるゝも、かゝらぬ御幸ならばをかしうもありぬへけれど、
よろづかきくらす御みだり心地に御目ごまらぬも、我なが
らいたうくんじにけるかなと思さる。いご高き山の峰に
花おもしろく咲きつゞきて、白雲をわけ行くこゝちするも
艶なるに、都のこご數々思し出でらる。

花はなほうき世もわかず咲きてけり、

みやこも今やさかりなるらん。

あご見ゆる道のしをりの櫻花、

この山人のなさけをぞ知る。

三 花のこすゑ

十七日美作國におはしましつきぬ。御心地なやましくて
この國に二三日やすらはせ給ふほご、かりそめの御宿りな
れば物深からで、候ふかぎりの武士ごもおのづからけちか
く見奉るを、あはれにめでたしと思ひ聞ゆ。君もおもほし
つゞくる事ありて、

あはれこはなれも見らん、我が民を

おもふこゝろは今もかはらず。

おはしますに、續きたる軒のつまより煙の立ちくれば、いほ
りにたける。ご打誦ぜさせ給へるもえんなり。
よそにのみ思ひぞやりし、思ひきや

いほりにた
ける
源氏物語「山
がつの庵にた
けるしばく
もこさゝひこ
なんこふる里
人」

雲清寺
不詳

民のかまごをかくて見んごは。

二十一日、雲清寺といふ所にていごおもしろき花を折りて、
忠顯少將奏しける

かはらぬを形見ごなして咲く花の

みやこはなほも偲ばれにける。

御かへし、

色も香もかはらぬしもぞうかりける、

みやこの外の花のこずゑは。

又小山の五郎ごかいふ武士に同じ花をやるごて、少將

うき旅ご思ひははてじ、一枝の

花のなさけのかゝる折には。

かくてなほおはしませば、來し方はそこはかさなく霞みわ

たりて、あはれに遠くもきにけるかなご、日敷にそへて都の
いごゝへだゝりはつるも心細う思さる。ほのかに咲きそ
むご見えし花の梢さへ、日敷も山も重なるにそへてうつろ
ひまさりつゝ、上り下るつゝ、らをりにいご白く散りつもり
て、むらぎえたる雪の心地す。

花の春また見んごこの難きかな、

同じ道をばゆきかへるごも。

いごかたしごは思すものから、猶さりごもたひらかにあら
ば、おのづから御本意遂ぐるやうもありなんなど、御心もて
慰め思すもはかなし。

四 あられの音

御いもひ
御いみの音
便。

隠岐の小島には、月日経るまゝにいそ忍びがたう思さるゝ
事のみぞかず添ひける。いかばかりのおこたりにてかゝ
るうきめを見るらむご、前の世のみつらく思し知らるゝに
も、いかでその事をも報いてんご思して、うちたえて御いも
ひにて、朝夕つごめ行はせ給ふ。法のしるしをもこゝろみ
がてらご、かつは思すなるべし。みづから護摩なごもたか
せ給ふに、いごたのもしき事夢にも多くなんありける。
つれづれに思さるゝをりくは、廊めく所に立出でさせ給
ひて、遙かに浦の方を御覧じやるに、蟹の釣船ほのかに見え
て秋の木の葉のうかへる心地するもあはれに、いづくをさ
してかご思さる。

こゝろざすかたを問はゞや、浪の上に

浮きてたゞよふ蟹の釣舟。

浦漕ぐ船の
續古今集小
町「須磨の海
士の浦漕ぐ船
のかちを絶え
よるべなき身
ぞかなしかり
ける。」

「浦漕ぐ船のかちを絶え」ご打誦じて、御涙のこぼるゝをあご
なくまぎらはし給へる、いふよしなく心深げなり。ねび給
ひにたれご、なまめかしうをかしき御さまなれば、所につい
てはましてやんごごなきあたらしさを、自らいごかたじけ
なしご思さる。

京には
光嚴院。

京には十月になりて御禊、大嘗會なごのいそぎに天の下物
さわがしう、内藏寮、内匠寮、打殿、染殿、何くれの道々につけて
かしがましう響き合ひたるも、片つ方は涙のもよほしなり
悠紀、主基の御屏風の歌人々に召さる。書くべきものゝな
ければ、彼處へまゐれる行房中將をや召還されましなご定
めかね給ふを、まだきに傳へ聞召しければ、よひの間の静な

彼處
隠岐。

るに、御前にここに人もなく、この朝臣ばかり侍ひて、昔今の御物語のたまふついでに、都にいふなる事はいかゞあらんぞすらん。さもあらばいこそ羨しからめ。ご打仰せられて、火をつくくごながめさせたまへる御まみの忍ぶこそれごいたうしぐれさせ給へるを見奉るに、中將も心づよからずいごかなし。いかばかりの道ならば、かりる御ありさまを見おき聞えながら、うきふる里にはいかで歸らむと思ふも、え聞えやらず。後夜の御行にさながらおはしませば、潮風いごたかう吹きくるに、霞の音さへ堪へがたく聞えて、いみじう寒き夜の氷をうち叩きて、閑伽たてまつるも、山寺の小法師ばらなごのこゝちぞするや。少將この中將なご辨折りて參れるも、いつならひてかご哀に御覽せらる。今

一度いかで世を御心にまかするわざもがなご、人の心のけちめわかるゝにつけても、深う思しまさる事のみ數知らず。

二〇 月草の花

一 なぎさの氷

かの島には春來てもなほ浦風冴えて浪荒く、渚の氷もごけがたき世のけしきにいごゝ思しむすぼるゝ事盡きせず。かすかに心細き御すまひに年さへ隔りぬるよご、あさましく思さる。候ふ人々もしばしこそあれ、いみじくくんにけり。今年は正慶二年といふ。閏二月あり。後の如月の初つ方より、ごりわきて密教の秘法を試みさせ給へば、夜も大殿ごもらぬ日數經て、さすがにいたう困じ給ひにけり。

さめざらま
しを

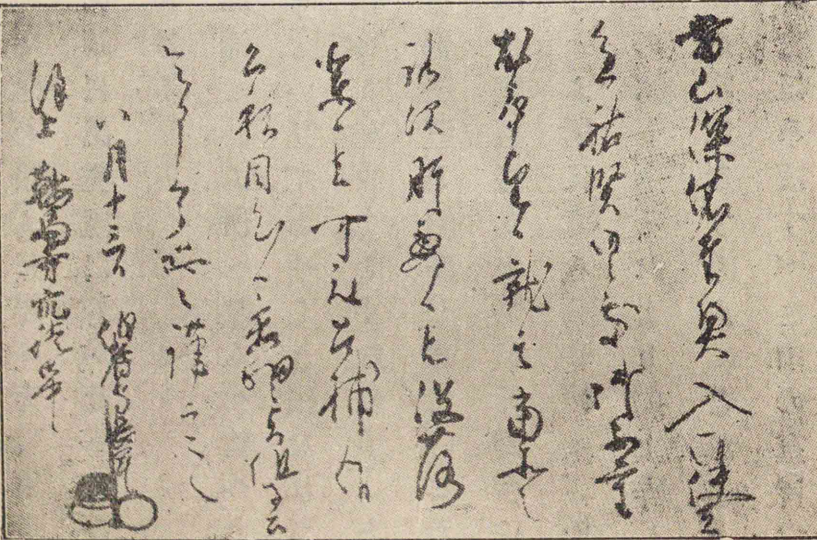
古今集、小町
「思ひつゝ、わ
ればや人の見
えつらん夢さ
知りせばさめ
ざらましを。」
源氏の大将
源氏物語明石
の巻に出づ。

心ならずまごろませ給へる曉方夢うつゝ、こもわかぬ程に、
後宇多院ありしながらの御面影さやかに見え給ひて、聞え
しらせ給ふこと多かりけり。打驚きて、夢なりけりとおぼ
すれど、いはむ方なく名残かなし。御涙もせきあへず、さめ
ざらましをと思すもかひなし。源氏の大將須磨の浦にて
父御門見奉りけん夢の心地し給ふも、いご哀にたのもしう、
いよく御心強さまさりて、かの新發意が御迎のやうなる
釣舟もたより出できなんやと待たるゝ心地し給ふに、大塔
の宮よりもあま人のたよりにつけて聞え給ふこと絶えず。
都にもなほ世の中しづまりかねたるさまに聞ゆれば、よろ
づに思しなぐさめて、關守の打寝るひまをのみうかゝひ給
ふに、しかるべき時の到れるにや、御垣守に候ふつはものご

筆蹟

當山深依下奉
悪人候上使者
進二祐賢一候之
處御不審尤本
望候就其當
所之路次肝要
候歟没落輩候
者可レ被二召
捕一候公私目
出候委細之旨
但馬公令レ申
候了恐々謹言
八月十三日
伯耆守長
年花押
謹上鞍馬寺衆
徒御中

も、御氣色をほの心得て、
靡き仕うまつらんと思ふ
心つきにければ、さるべき
かぎり語らひ合せて、同じ
月の二十四日の曙に、いみ
じくたばかりてかくろへ
ゐて奉る。いごあやしげ
なる海士の釣舟のさまに
見せて、夜深き空の暗さま
ぎれに押出す。折しも霧
いみじうふりて行く先も
見えず、いかさまならんこ



(寶墨徵史) 蹟筆年長和名

稻津浦
八橋郡

船上寺
八橋郡の船上
山か西伯郡の
大山か審なら
ず、一書に船
上山大山寺ま
あり。

あやふけれど、御心をしづめて念じ給ふに、思ふ方の風さへ吹きすゝみて、その日の申の時に、出雲國に着かせまたひぬ。こゝにてぞ人々心ちしづめける。

おなじ二十五日、伯耆國稻津浦といふ所へ遷らせ給へり。この國に名和の又太郎長年といひてあやしき民なれどいご猛に富めるが類ひろく心もさかくしくむねくしきものあり。かれがもごへ宣旨を遣し給ひたるに、いごかたじけなしと思ひて、ごりあへず五百餘騎の勢にて御迎にまゐり。又の日賀茂の社といふ所に立入らせ給ふ。都の御社思し出でられていごたのもし。それより船上寺といふ所へおはしまさせて、九重の宮になずらふ。これよりぞ國々のつはものごもに御敵をほろぼすべき由の宣旨つか

前の守
佐々木清高

東寺
東都下京區九
條町。

はしける。比叡の山へものぼらせられけり。かくて隱岐には、出でさせ給ひにし晝つ方より騒ぎ合ひて、隱岐の前の守追ひて参るよし聞ゆれば、いごむくつづく思されつれど、此處にもその心していみじう戦ひければ、引返しにけり。京にも東にも驚き騒ぐさま思ひやるべし。正成が城のかこみに、そこの武士ごも彼處に集ひをるに、かかる事さへ添ひにたれば、いよく東よりも上り集ふめり。

二かへる波

さて都には伯耆よりの還御さて世の中ひしめく。まづ東寺へ入らせたまひて、事ごも定めらる。二條の前の大臣平道めしありて参りたまへり。こたみ内裏へ入らせたまふべ

き儀たゞ遠き行幸の還御の儀式にてあるべきよし定めらる。關白をおかるまじければ、二條の大臣氏長者を宣下せられて、都の事管領あるべきよしうけたまはる。天の下ただこの御はからひなるべしとて、このひごつあたり喜び合へり。

六月六日東寺より常の行幸のさまにて内裏へぞ入らせ給ひける。めでたしこも言の葉なし。去年の春いみじかりしはやこ思し出づるも、たごしへなし。今も御供の武士ごもありしよりはなほ幾重ごもなく打圍み奉れるはいごむくつけきさまなれど、こたみはうごましくも見えず、たのもしくてめでたき御守かなと覺ゆるもうちつけめなるべし。世のならひ時につけて移る心なれば、皆さぞあるらし。先

陣は二條富小路の内裏に着かせ給ひぬれど、後陣の兵はなほ東寺の門まで續きひかへたりきとぞ聞えしは、まここにやありけん。正成もつかうまつれり。

かの名和の又太郎は伯耆守になりて、それも衛府のものごもに打ちまじりたるめづらしくさまかはりてゆすりみちたる世の氣色かくもありけるを、なごあさましくは歎かせ奉りたりけるにかご、めでたきにつけても、猶前の世のみぞゆかしき。車なご立續きたるさま、ありし御くだりにはこよなくまされり。物見ける人の中に
昔だにしづむうらみをおきの海に

波たちかへる今ぞかしこき。

むかしの事なご思ひ合するにやありけん、金剛山なりし東

禮成門院
禧子

の武士ごもゝさながら頭を垂れて参りきほふさま、漢のは
じめもかくやご見えたり。
禮成門院も又中宮ご聞えさす。六日の夜やがて内裏へ入
らせ給ふ。いにし年御ぐしおろしにき。御惱なほおこた
らねば、いつしか五壇の御修法はじめらる。八日より議定
行はせ給ふ。昔の人々のこりなく参りつごふ。十三日大
塔の法親王都に入り給ふ。この月頃に御ぐしおほして、え
も言はずきよらかなる男になり給へり。からの赤地の錦
の御鎧直垂ごいふもの奉りて、御馬にてわたり給へば、御供
にゆゝしげなるものゝふごも打圍みて、御門の御供なりし
にもほごゝ劣るまじかめり。速かに將軍の宣旨をかう
ぶり給ひぬ。流されし人々程なくきほひのぼるさま、枯れ

父の入納言
宣房

にし草木の春にあへる心ちす。その中に季房の宰相入道
のみぞ、預なりけるものゝ情なき心ばへやありけん、東のひ
しめきのまぎれに失ひてければ、兄の中納言藤房は歸り上
れるにつけても、父の大納言母の尼上なご歎つきせず、胸あ
かぬ心地してけり。
四條中納言隆資ごいふも頭おろしたりし、また髪おほしぬ。
「もごより塵を出づるにはあらず、かたきの爲に身を隠さむ
ごてかりそめに剃りしばかりなれば、今はた更に眉をひら
く時になりて、男になれらん、何のはゝかりかあらん。」ごぞ同
じ心なるごち言ひ合せける。天台座主にていませし法親
王だにかくおはしませば、まいてごぞ。誰にかありけん、そ
の頃聞きし、

墨染の色をかへつ、月草の
うつればかはる花のころもに。

増鏡鈔本終

大正六年三月七日印刷
大正六年三月十日發行
大正六年五月廿二日訂正再版印刷
大正六年五月廿五日訂正再版發行

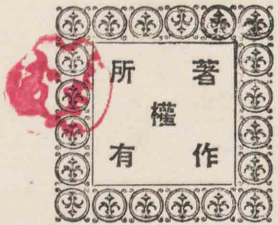
定價金三拾二錢
昭和五年度
臨時定價金五拾二錢

編者 吉田彌平
東京市小石川區高田老松町五十二番地

發行者 上原才一郎
東京市神田區通神保町六番地

發行所 光風館書店
東京市神田區通神保町六番地
(電話 國神田三〇八七番)
(振替口座東京三二七番)

印刷者 山崎與吉
東京市神田區通神保町六番地



本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に
賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候

大五六
大五六
大五六
大五六
大五六
大五六
大五六
大五六
大五六
大五六

10.13
25
75
23
28
23
111

38
29

山
山
山
山
山
山
山
山
山
山

三
三
三
三
三
三
三
三
三
三

山
山
山
山
山
山
山
山
山
山

